第五百拾貳號目次

女學雜誌　毎月二回發行

●女學雜誌定價表●

前金	
壹冊定價	拾錢
半年分定價	壹圓拾錢
一年分定價	貳圓
(內國無郵稅)	

代金は總して前金にて御注文ありたし◎年來引續き購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ甚だ不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候

廣告料		
一行(廿二字詰)一回		前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金　送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

明治三十四年二月五日印刷
明治三十四年二月六日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
(電話番町十九番)

女學雜誌

明治三十四年一月廿五日發兌

第五百拾貳號

社説

新年新感

女學雜誌の知己數ば問を寄せて曰く、女學雜誌は休刊せし乎と。吾人對えて曰く、否な、何んぞ休刊をだに爲さん、寧ろ大いに絶叫せんとするなりと。而も尚ほ遲々して出でざるヿ茲に久しく、數たゝび辱知諸君の掛念を引けり。吾人今ま本紙上に於て其の事由を述べ、些さか知遇の恩に酬ゐざるを得ず。抑々吾人が暫らく沈默したる所以のもの、敢て特更なる理由ありてにあらず、但だ心機進まずして、甚たく嫌厭の情を生じたればなり。回顧すれば、女學雜誌の初めて世に出でたる以來、既に十又六年の星霜を經たり。然るに、此間、曾て一と度び春畝先生の鹿鳴館事件を攻擊して、二ヶ月、發行停止せられたる外は、歳々月々文旗を飜がへして、遂に一回だも筆を收めたるヿなく、其の尤も多き時は、毎月四回、その尤も少なき時も、月一回以上發行せざるヿはなかりしなり。左れば、吾人が筆を握て、女學と時事とを論ずるは、宛がら三度の飲食に類して、左して更まりたる事とも覺えざりしに、去年、ふとしたることより法庭に出で、引いて存外の煩わしきヿもありて、少こしく女學雜誌の發行を止めたる時、凡そ文人が筆を忘るゝヿの如何に氣樂にして、又如何に多くの閑日月を生ずるものなる乎を初めて經驗し、十又六年間、吾人が未だ曾て得たるヿあらざる愉快に觸感したり。但憾む此の愉快は、少時日にして既に消たれ共、一種の習慣之より來り、執筆太はだ懶うく、沈默極めて風味あるヿを覺え、知らず識らず久しく讀者に負くヿを爲しぬ。然るに讀者諸君の親厚なる、屢々書を寄せ、幾度か吾人を激勵し、眇たる女學雜誌なる者、如何に多數の誠實なる知己を有するかを初め

て知り、茲に悚然として懼れ、奮然として激し、遂に復た一種の感應を湧起するに至りぬ。嗚呼吾人の如きは到底僻物たることを免かれざるものか、世上もし女學を冷遇し、女學の雜誌を寒待すべき時節なりせば、吾人は貧、骨に徹し、時、生命を縮むるとも、斷じて絶叫を止めじ。吾人をして絶叫せしむべき大なる刺激は、大抵此の類のものなればなり。たゞ夫れ方今、女學雜誌類の續出すること、明治二十年前後、もしくは同三十年前後に似て、世上此の種の事業に競はんとするもの格外に多し。是の如き時は、吾人をして怠慢ならしむること、何ものよりも甚だしきを常とす。當時もし多年紙上の知己なかりせば、吾人の如き、暫らく引退して世より忘れられんことを希ふものなる耳。左れば、諸君、幸ひに吾人の一僻を容るし、曩昔の怠りを恕せよ。今や心機復た湧き、新年と同もに再たび諸君に見ゆることに力めんとす。諸君庶幾くは引誘せんか。

有二淑柔之姿一荊芧 可三以行二婦道一、
何必綺組文繡。
致二賓主之敬一鷄黍 可三以當二大享一、
不レ在二鐘鼓笙簧一。

支那人文明論

一名、團徒拳黨の奇論

倫敦の一支那人、自から拳黨と稱し、エキスプレッス新聞の記者に語りたる所のもの、我國の新聞にも記載せらる。素と戲作なるべしと雖ども、西洋人中よく斯の如く支那を觀じ得ることのなきに非ずとせば、其の眼も亦た高しとすべし。我邦方今の人只管らに支那を誤解す。此文もと戲に出づるとすとも、吾人は寧ろ眞摯の論辨として讀者の一顧を促がさんと欲するものなり。女學雜誌記者識す。

一躰君等英國人は、支那の事件を只自箇流に見るからいけない、試に支那人と成て觀察して見玉へ、西洋の文明など云ふものは吾々から見れば松蕈見た樣なもので、昨今ヒヨックリ出來たものだ、支那の文明は數千年、マア一寸ハッキリと云へない程古いもので、少くとも吾々は君等より二千年は慥かに進んで居るのだよ、昔々丁度君等が今遣つて居る樣に、支那でも生活の為、金錢の為、權力の為に競爭したることがある。又彈藥だの、活版だの、其他色々巧者な發明をしたとも

ある。併し吾々は其の様な時代を疾くに過ぎて了まつて今は其の不必要なことを悟つて居るのだ。吾々は又宗教に關しても懷疑時代、妄信時代、分裂時代をも經過した。所謂獻身者。所謂革命家。所謂ノン、コーフチーミスト、そんな人は澤山在つたのだが、何も彼も過ぎて今はトランシション時代に在るのだ。左様。其様な事は千年も昔の事さ。

それで、吾々は過去の經驗に依つて智識を得た。吾々の祖先が失錯したり、災難に遇つたりしたものであるから、彼等が得んと欲して一生懸命に成つたものは實際得んと欲するに足りないものであると云ふ事が分つた。吾々今は慾も望も、只々人生の幸福を得たいと云ふ平和な希望計りに成つて了まつて、宗教なるものも只生活上の哲學になつて居るが、是も過去二千年の經驗で以て、是でなくてはならないと云ふことが慥められた。

吾々は人生希望す可き最善のものは幸福であると固く信じて居る、それで子孫には職務を盡し、德義を守り信用を重じ、天下と共に樂むに非ざれば幸福と云ふものが得られないと云ふことを訓へて居る。見玉へ支那人中一人のみ榮耀せんが爲に、

他人を苦めて平氣で居るものは甚だ少い、必らず人と樂しむと云ふ風が在るではないか、それから支那人は所謂隱居するなど云ふとは決して無い、一生涯働くのだ子、働くのは吾々義務の一つであるから、又吾々樂みの一つとなつて居るのだ人生を最も多く樂んで送る、之が支那人の理想で、所謂支那哲學の勤めて怠らざれば樂も亦盡るとなしとは即ち是だ、支那へ往つて見玉へ、何處何如なる所に往つても皆一樣に滿足して居ると云ふ風が在る、君等は吾々を指して無智曚昧怠惰の生涯を送つて居るものだと云ふが、決して左様でないよ、吾々は望み通りの生涯を送つて居るのだ、誰でも此上改良することは出來ない。

それであるのに、君等西洋人は自ら新思想なりと稱するものを持て支那へ來るのだ、君等は宗教を持て來る何だタッタ千九百年の嬰兒ではないか、君等は北から南、東から西へと飛んで行く様に鐵道を布設せいと云ふが、その様なものは吾々から見て面白くもなく、又た必要でもない。君等は又紡績所だの製造所だのを建ていと云ふが、吾々には過去幾千年の經驗で得た無類の美しい織物や、染物がある、之を無三〳〵紡

績所製造所で打壞して了ふにも及ばないではないか。

吾々は此西洋人の所作に反對するのだ、何も要らん御世話は止めにして、介意はないで居て呉れゝばよいのだ。吾々は秀麗なる故鄕の山河を自由に樂まんと欲し、過去幾千年經驗の結果を勝手に喜ばんと願ふのみである。君等に向つてドウカ歸つて呉れいと望むと、君等はいやだと云ふ。そして港を渡せの、土地を讓れのと云ふが、之を拒むと早速强面で遣つて來のだ。其處で色々に考へたが、吾々黨は遂に君等の干渉より脫するは、只々君等を殺して了ふより他に道なしと決心した、吾々は固より兇猛血に渴する蠻人ではない又他人の者を强奪せんとする盜賊でもない、併し君等に正義の眼を開かしめんが爲め、勸告もし、議論もし、哀訴もして、而して遂いに聽かないのであるから是上は最早致方がない、最後の手段即ち兇器を取て殺戮するより外ないのである。

彼の宣教師等に就て考へて見玉へ。彼等は所謂新宗教なるものを持て來る。新宗教とは其の本旨に就てさへ色々議論が有て、互に舌戰論爭して居るのではないか。彼等は其宗教を持て來て、此宗門に入らなければ天國へ行くとが出來ない、永遠の罰を受けるなど說敎して女小供其他心の弱いものを刧かし、それが爲に家內の平和を亂し、一箇人の心を惑はせるである。寬忍ならぬではないか。

若し吾々が鐵道や器械が欲しければ、之を買ふのに金錢を借まない。併し其樣なものは欲しくないのだ、吾々には必要でない、其が無くても滯りなく用は足して行くのである。然るに君等は吾々が欲しくないに拘はらず、是非とも買へと强ゆるが之れは不正ではあるまいか。余は如斯き所業を稱して鹵莽なりと云ひ、暴虐なりと云ふ。世人は支那人を目して軍人でないと云ひ又支那人も軍人でないと云ふとを事實に屢々示したが、左樣、吾々は最早や軍人ではない、モット開化したのだ。戰爭は蠻人のする事である。吾々は戰爭を止めて今日の如く開化の域に在るから、其の爲に支那人は他の人種よりも一番多く、年々死ぬものも世界中一番多いが、人口の增加する割合も亦列國中第一等に居る。

若し吾々世界の人類を蹂躙せようと思へば、何時でも蹂躙して見せる、併し吾々の文明は既に熟し、哲學も道德も完全して居るから、其樣な無道な考が起らないのである。吾々四億

萬人奮起したらば、天下誰か能く之に敵し得るものがある歟。君等は吾々が如斯く力ある者であると云ふ事を自ら知らないと思つて居るのである歟、知つて居る、知り過る程知つて居る。白人たるもの、世界の主人公は自分等でない、支那人であると云ふ事を知るが宜しい。

支那を襲撃して成功したと稱せらるゝ戰爭が、從來二十度びもある。併し其結果はドウダ、襲撃したものが支那に權勢を樹立し得た例がある歟、否、敗北者が常に戰勝者を同化して居る。皆支那人にして了つて居る猶太人でも支那に來たものは皆な支那化して了ッて居るが、他の國で猶太人を同化し得た國がある歟。

余は繰返へして、支那には西洋に在る如く、人類を支離滅裂せしめたる力が實際一も存じてゐないと云ふ事を明言して置く。政治、宗教、箇人の野心、侵略の必要、土地を欲し金錢を欲する慾望、その樣なものは支那には決して無いのだ。君等は支那人が愚鈍で、不注意で小供の樣に素朴であるから、其樣なものが無いのであると思ふかも知れないが、夫程大きな間違はない。支那人は幸福の秘訣を會得して居るのだ。支那人の生涯は靜穩で、苟くも良心が明かである間は決して何物も彼を苦めることが出來ないのである。吾々支那人の特質は實に如斯し。君等さへ吾々に干渉しなければ、吾々も亦決して君等に干渉しない、之は充分記臆して置くが宜しい。」

文明の流轉

世界の文明が、川より山に、東より西にと流轉しゆくとは學者の一齊に論ずる所ろであるが、日本に於ける文明の流轉は更に別種の趣むきを呈するのである。或る時は、朝鮮の文明、又或る時は天竺の文明、又或る時は中華支那國の文明、又或る時は西洋ヲランダ國の文明と、夫々次々に變わつてゆくので、申さば文明の流行が次第に移り變てゆくのである。其の流行に乘じて、當世の風に染ることが上手なれば利巧に見え、之に外るれば何となく馬鹿に見える。其の流行が盛んになれば、一から十まで其の趣むきにかぶれねば成らぬ、然し一と度び其の流行が去れば、夢の醒めたる如く、氣の拔けたる如く、丸で毫末の未練も殘らぬ。之が、日本に於ける文

明流轉の形情である。

試ろみに、支那流義が流行つた折の事を追懐して見られエ。衣服より文章、式禮より政治、凡そ百般の事一として支那にまねぬとはなかつた。文明とは支那の真似をすることで、開化とは、支那に似ることであると確定して居つた。此際何人が能く卓然として世の羈絆を脱したか。多少、脱するものがあればたゞ「頑固である、分らずやである」とシカ思はれなかつたのである。

然るに、此一と幕が了つて、次の廻り舞臺となれば、次が西洋で、西洋の風にうつらぬものは舊弊頑固と言はれた。其の舊弊と云ふ言葉は、大悪無道と云ふ言葉よりもまだ恐ろしい言葉で、人間、コノ形容詞をつけられるほど苦しいとはない様に思はれた。斯て、今日はまだ西洋の芝居が興行中で、見物はひたすら之に醉つて居るのである。

其の醉つた眼こから、支那を見ると、如何にも阿房らしく見へる、李鴻章は馬鹿氣て見へる。其國は今にもアブナそうに見へる。然し、かく見へると言つてエラ相なとを言ふ青年國が果して外から見て尤もに見へるであらう乎。

昨日まで、一も二もなく吾を崇拝したヤッコが、一寸と洋行して上ワッ面を見て、今度は又一も二もなく西洋西洋と言ふとして見たらばドウカ、其の見識の程も分る。餘りエラクも見へぬでは無い乎。支那人が日本を見て餘り感服せぬのは無理のないとで、まだあれ丈けにして來るのは、餘程雅量があると言つて宜しい。留學生をよこすなどは、ナカ〱見上げたものだ。「エルサレムの女よ、汝自らの爲に泣け」と言はれし聖もあるが、あまり支那の爲めに計り心配せぬが宜しい。支那は中々亡びる國では無い。

年頭末路

新年とは「時」に變りあるにあらず、氣を新たにするが故に、新年なり。末路とは、路の絶ゆる謂ひにあらず、人心の萎靡するとなり。嗚呼、新年のさびしきと、今年の如きは稀なり、人心の變わらざると今年の如きは稀なり。蓋し、藩閥政府既に末路に瀕して、一新せる時代精神未だ大に發揚せず、世寂寥たらざるを得んや。夫れ、末路は亂なり、亂は太平にあらざるとを此の年頭に於て覺悟せよ。

婦人の修養に就て

青柳有美

左に掲ぐるは去る日秋田縣師範學校附屬小學校に開かれたる秋田婦人學會常集會の乞に應じてなせる講演の大意なり。

弱年なる薄德非才の私が、些かたゞ女子教育に關係し居るの故を以て、今日諸君と相見て共に御話を致すことの出來るのは、非常の光榮である。曾て英吉利の物理學者にファラデ井ーといふ人があッて日々王立學士會院で電氣學上の講演をして居ッたが、これに欠かさず出席して其講演を聽きながら常に眠ッて居る一人の老人があッたそうだ。然し、その老人が死ぬる時には遺言して我が財産を悉く王立學士會院に献納したとのことである。これはファラデ井ーの講演を聽ひて大變能く寢むられたので、感謝の意を表するためであッたとのことだ。また有名なる音樂者のショッパンが、其幼時ピヤノの調音で亂暴な小供たちを眠らしたといふことは、誰も知ッて居る話だ。既に深味先生の有益なる御話も長くあッた後のこと故、もし私の話が面白くない爲めに眠る樣な方が小さいお小供衆たちのうちにあッたとて、私は決して氣にかけぬ。寧ろ私の光榮であるから遠慮なく充分グス〳〵寢入つて頂きたいものだ。今日此處で御話し致す樣になるや否やは今朝まで未定であッたので且つは中村千代松先生より餘り君の主義として居るところは話さんで見合はし普通の修身談をやッたがよからふとの御注意も今朝あッた故、けふは今の日本婦人が心掛けて修養せねばならぬと思ふ點に就て、少し考えて居ることを五つほど御話致そうと思ふ。

(第一)**淺くとも博き智識を得べき事** 女子は、概論すれば、自ら主動者となッて働く者でない。人の働きを補けてゆく補助者である。則ち男子の補助をしながら活動すべきもので、獨立して働くといふ分子は其本來の性質に於て持ッて居らんところだ。もし諸君が醫師に就て一瓶の水藥を得たならば、そのうちに純粹の藥といふものは甚だ少量で、多分は殆んど何の効能もないと思はるゝ樣な水であるを見い出すだらふ。

さらばとて、そのうちなる純粹の藥のみを用ゆれば、藥は却て毒となッて身躰を害する樣になる。故に水を混じて之を融和する必用があるのだ。女子は假令へば水藥中の水の如きもので、男子はその藥の精の樣なものである。社會の活動者は無論男子に相違ないが、もし活動を専らとする男子のみが寄り集ッて居るものならば、社會は遂に一大顛狂院と化し去らざるを得ないのである。故に、殆んど無爲の如くに見ゆる女子が、その中に立ち交りて男子の作動を融和補助し、その職責を大成せしむるのであるのだ。是に於てか、淺くとも博き智識を得べき必用が起ッてくる。

婦人が己れの夫として持つべき男子は、果して如何なることに趣味を持ち、如何なる職業を樂む人であるか預め解ッて居るものでない。又自分が生み出すところの子孫が同じく如何なる趣味を持ち如何なる職業を採るに至るかも、常に未定の問題である。殊に、少しく人の頭に立つ樣な方の夫人や令孃方にでもなると、凡ての善良なる事業と思想と企とに同情を寄せて保護を與へねばならぬ。かく其夫と子孫と社會との思想と企とに同情を寄せて之を補助援護するには、自ら又これに對する趣味とインテレストとを持ッて居らねばならぬものだ。そうして、かく凡てのものに對して同情と趣味とを持つ樣になるには、自らそのことに關する智識を多少蓄へて居ッて、幾分か自分の經驗のうちに、その夫たるもの子孫たるもの思想家たるもの作業家たるものゝ爲しつゝあるところと似た點がなければならぬ。若しも生物學に關する智識と趣味とがなくば、己が夫もしくは子孫の、一羽の蝴蝶を追ひ一もゝとの花卉のために狂して居るのが馬鹿らしく見えて、これを邪魔したくなる。又美術に關する智識と之れに伴ふ趣味とがなくば壊れかけた殿堂の研究に浮き身を窶し、衣食を忘れ居る人に同情して之を保護する譯には行かぬ。却て氣違ひでゝもある樣に思ッて之を遮ざける心になる。凡て此くの如くで詩美のこと哲學思索のこと宗教信心のことなどに於ても、自ら之を幾分かづゝ修めて居らぬと同情が起らぬものだ。獨逸から歸ッて來られたドクトルで耳科の名醫なる小此木信六郎君といふは隨分口の惡るい人であるが、曾ッて談られたことがある。一躰日本は男尊女卑で西洋は女尊男卑だなどといふが其れは大嘘で日本ほど女の權利の強いところはない。獨逸

などならば女は何んでも男子の通りになッて、妻たるものは何處までも男子たる夫の事業と思索とを補けてゆくが、日本ではこれの正反對で、何んでも夫の爲る良いことに何うの此うのと故障を述べ、之を妨げて飛んでもない惡智慧などつけてゆくものは、皆な女だ。女の勢力もヱライものでないかといふことだッた。これは極端の言ではあるが確に眞理であッて、かく夫の爲ることに同情の出來てこないで、妨げたいと思ふ心の起るのは、全く夫のやッてることに關する智識がないからである。小供や孫及び世間の人に對する場合も又同じだ。而して如何なる趣味と職業との夫や子孫や被保護者を持つに至るかは、とても豫め解るものでないことは、既に申上たる如くであるから、科學、哲學、宗教、美術、文學、工商業、外國語、冒險業など、其他百般に關する智識を蓄えて置いて、如何なる夫を持ち、如何なる子孫が出で如何なる篤志家が現はれた時にも、之れに萬腔の同情を注ぎ、充分の補助と援護とを與えることの出來る樣に、常々用意と仕度とを整えて置かねばならぬ。然らずんば機に臨んで甚しき狼狽とマゴツキとを來す樣になる。若し婦人たるものが其本來の性質に於て、社會活動の主動者たるべきものならば、無論一つの智識を深く厚く蓄える必用があるが、前に申せし如く、補助者となり援護者となるべき性質のもの故、深き智識を得るよりは、淺くとも廣き智識を得る樣に力めて出來るたけ、多くの學科を緒口だけでも學び修めて置くことが最も大切なることである。則ち、淺くとも博き智識を得べき事とは是れ私が今日諸君に御勸め致し度い第一義であるのだ。

(第二)滑稽即ちおどけの趣味を解すべき事　男子には滑稽即ちおどけの趣味を解する力のあることは甚だ明かなる事實であるが、御婦人の方々には之を解し其面白味を感ずる能力が甚だ乏しい樣に思はれる。

此の如きは一家の調和と圓滑とを計るために頗る不便なことであるから、是非これを解する樣に修養をして頂きたいものだ。世の中といふものはそう何時も裃を着けた如くに行くものでない、時には滑稽とか、おどけとかいふ分子を、そのうちに交ぜて物事を角たてず圓滑にやッて行かねばならぬ。然るに御婦人の方々は何うしたものか之を解する力のないところから凡て夫や何かのいふことは、昔の聖人の御說敎でも

聽く樣に心得て、一言一句論語か孟子か蓮如上人の御文章か但しは聖書にでもある言葉の樣に甚だ苟もすべからざるものゝ如く解釋する。これは一寸考へると大變に結構なことの樣に思はれるが、實は非常に憂ふべきことであるのだ。男子といふものは、元來其性質が磊落なものであるから、時々滑稽も言ひおどけた行ひもする。然るに之を一々四角四面に解釋されて、悉く聖經の文句か、或は其一擧手一投足が末代までの軌範となるといふ古聖人の行でゝもある樣に思はれては甚だ困る。婦人が男子の言行を此の如きものと思ひ違えて、そのうちに含んで居る滑稽の趣味を解せぬところから、夫や其他の男が、別に差したる意味もなく慰み半分に口から出した言葉を、大變に何か意味の深いことの如くに誤想して、かれこれと氣にかけ、つまらんことに腹を立てたり何かすることになる。そうなると家のなかのことも社會のことも總て角だッて來て、滑りッこく行かぬ譯だ。則ち男か一寸滑稽に言ッたことにも、何んのかのと理屈ッぽく當られて來て、家庭の不調和を起すことになる。これは泉鏡花の『湯島詣』にある話だが、學士あがりの貴族の婿殿が一夜天王寺の墓畔を通ふッて人魂を觀『あれ人魂が飛ぶ』といッたら、傍らなる女學生あがりの細君は『なに、人魂なんていふものではありませんよ、あれは燐の火です』と反抗したそうだ。然しそれが遂に兩人離緣の遠因となッたのである。この樣に理屈ッぽくッて滑稽の趣味に乏しいのは、殊に少し本を讀んだ女に多い。其邊はよろしく注意して頂きたいものだ。

また、一家のうちにも社會のうちにも人々が皆な滑稽の趣味を解して居れば、別に角たてずに甚だ圓滑に行くことの出來る事が隨分澤山ある。然し此趣味が解せられないと、一寸したことまでが甚だ六ケしくなッて來て、談笑の間に決するといふ樣なことが、兎ても出來にくい。すると、家庭のなかも、『左樣然らば』のものとなッてしまッて、所謂和氣藹々たる現象を見ることが六ケしいのである。故に、滑稽の趣味を解するといふことは、一家の調和を計り、和氣に滿ちたるものたらしむるためにも甚だ必用なのだ。是に於てか、私が諸君にお勸め致したい第二義は『滑稽即ちおどけの趣味を解すべき事』である。婦人にして若し充分にこの滑稽を解する能力を鍛錬されたならば、夫婦の間も一層睦しく、家庭の波瀾も一

段と減ずる樣になるだらふ。

扨差し當りの法として、この滑稽の趣味を解する樣になるには川柳といッて『一かゝへあれど柳は柳かな』などゝいふ句のある滑稽の意味多き俳句を讀むがよからふと思ふ。この川柳を集めたものに、『柳樽』といふ本があるから、之を精讀せられたならば、この大切なる趣味を解するための修養に、其便甚だ多かるべしと思ふのである。呉々も社會と家庭との圓滑を計るためには、婦人が滑稽の趣味を解するといふことが必用だ。

(第三)**度量を寛宏にすべき事**　女といふものは男よりも小さな一寸したことを氣にかける人種である。夫が何かすこしのことがあッたからとて、直ぐに腹を立てゝ眞赤に怒りだす。一寸禮を欠く樣なことをいふたからとて、フクレて顔をしかめる。それでは、兎ても一家の調和を計りて行くことの出來るものでないのみならず、女子たるもの妻たるものが一生の大不幸となるのだ。その邊のことに氣がつかないで、何んでもない樣なつまらん弱點や欠點を看つけて、鬼の首でも手に入れた樣に男のところに食ッてかゝるほどにエガミつくのは非常の愚である。何もそうッペコペ擾ましく騷ぐ必用がないのだ。こんなことがあッては女の顔がたゝぬ、かういふことを言はれては女子の面目に關するなどゝいらぬ腹を立てるのが、何よりの間違ひで、殊にこれは少し本を讀んだ方々にある悪い癖だ。まづ男がどんな事をしてもどんなことをいふても、馬耳東風と見ぬフリ聽かぬフリをして何處で風吹くかといふ顔をして居るのが、何よりの上分別である。男の手落な行ひなどゝいふものは意見をされてそれで直るものではない、却て悪るく氣が立つて邪道に深入りさするばかりだ。譬を以て申上ぐるが、條虫の出た時に、力を極めて之を引き出そうとすれば、途中で斷れてしまッて、虫が却て腹の中に殘る。その通りで、夫の欠點不完全を廢めさせようと思ッて、無理にこれを責め出せば、却てその悪いところが抜けないで何時までも直らない。然し、その條虫が出て來た時に、躰温と同じ温度の微温湯を盥に汲んで、これに腰を入るれば、虫はその湯の中を腹の中同樣に心得て段々匍ひ出し來り、遂に全く腹中に條虫の痕跡を止めない樣になるものだそうだ。矢張り其の如くで、夫の不行跡を改めさせようと思ふならば、

ツン〳〵眼を圓くしたり口を尖らしたりして小言をいふことは止めて、之を甚だ温かき同情を以て取扱ふがよい。すると何事もうち解けて來て其のうちには不行跡も抜けて修るようになるのだ。ところが、女といふ人種は大低そう行かずに、何かあると直ぐガミ〳〵青筋をたてゝ怒り出す故、結果が却て甚だ面白くないものとなる。そこを篤と飲み込んで心を極大きく持ちツマランことをクヨ〳〵氣に掛けて心配しない様にするのが大切だ。

また、男といふものは是れで仲々磊落な人種だから、色々自分のヤッたことなら悪るいことも何もかまはず、打ち出して話してしまふ。それが夫婦の間などで云へば大變面白いところなので、益々交情を厚ふする手段になるのだ。ところが、女はそんな事を聽かせられると、直に顔色を變へてイヤ味をいッたり、不愉快な眞似をして見せたりする。また、一寸失敬なことや女を馬鹿にした様なことを言ッたりもするが、同じく腹を立てゝスネたりケンツクを食はせたりする。女がそんなことをする結果は非常に恐るべきものであッて、御婦人方各々も知り給はぬ程の影響を一生の上に生ずるのだ。即ち、一たび一寸したことを言ふた爲めに、六ケしい不愉快な顔でもされると、以後は餘程注意をする樣になッて、あァいふ話をするとあァ怒るから、まづ何事も語り聽かせぬが上策であると、こゝに隱くしだてをする氣になりて、自分の弱點と不行届とに關する話は、成るべく妻などに漏らさぬ樣にし、言ひ度いと思ふことも控えて言はぬ樣になるのだ。そうなると、又自然に夫婦の間にも隔ての膜が出來てきて、そこに夫婦別々の心になり、男子は一切その秘密を明かさず、妻をのけものにする譯になる。女子一生の不幸これより大なることがないではないか。それだから、つまらん一寸したことを言はれたからとて少も氣などにかけず、なんでも鷹揚に心を大きく持つて何處で風吹く樣な顔をして居れといふのだ。堂々たる五尺の男子が其秘密をうちわけて己が弱點と不行届とを語つてくれるのは、實に感謝すべきことではないか。それにケンツクを食はしたりスネたり、顔を悪くしたりするとは、何たる不心得である。

新躰詩家で有名な島崎藤村といふ人は、矢張隨分口の悪るい男であるが、この頃婦人のことに關して二時間半ほど色々語

ッた末にいふたことがある。『女といふものは馬鹿なもので、若し本當の話をして知らすると朝から晩までクヨ〳〵泣いてるがまずいものを拵えても甘い〳〵なんて、いゝ加減に賞めておけばコロ〳〵悦んで居る』といふ話だッた。これは全く誠實だので女にはどうもそういふ性質がある。これは實に悲むべきことなので、爲に男子は少しオコラれそうなことは正味のこころを女に話さず、嘘ばかり良い加減に聽かしておくようになる。そんな嘘を聞かせられてそれでホク〳〵悦んで居てもツマらん譯ではないか。それだから、なんでも氣を大きくして小さいことは氣にかけるなと申すのである。是に於てか、私の今日諸君に御勸め致したい第三義は『度量を寛宏にすべき事』といふのであるのだ。

(第四)手練手管を學修すべき事

(以下次號)

各府縣高等女學校及師範學校女子部寄宿舍取締類別表（承前）

六、炊事の方法及其監督

一般に交番自炊せしむ

一、日番のもの

京都(師)　京都(女)　奈良(女)　山口(私女)　熊本(私女)

二、週番のもの

千葉(師)　栃木(女)　山梨(師)　京都(師)一人ノミ
和歌山(師)　久留米(女)　鹿兒島(師)

三、月番のもの

香川(師)

四、計算をして且金錢支拂をも爲さしむるもの

栃木(女)　靜岡(私女)　德島(師)　久留米(女)　鹿兒島(師)
和歌山(師)

五、計算のみを爲さしむるもの

宮城(師)　岩手(師)　京都(師)　和歌山(師)　富山(師)
廣島(私女)　愛媛(私女)　小倉(女)

七、生徒所有の金錢物品取締法

一、金錢物品共に大抵各自に保管せしむるもの

山梨(師)　和歌山(師)　佐賀(師)

二、金錢は舍監に於て總て預るもの

京都(師)　奈良(女)　山口(私女)

三、生徒所持現金の定額を定め其定額以上は舍監に於て預るもの

(三十錢)を定額とするもの

久留米(女)

(五十錢)を定額とするもの

群馬(女)　靜岡(私女)　富山(師)　島根(女)　廣島(私女)
香川(師)　熊本(私女)

(壹圓)を定額とするもの

高師　新潟(師)　宮城(師)　福岡(師)　岩手(師)
秋田(師)　京都(女)　福井(女)　德島(師)　小倉(女)
長崎(師)

金錢消費方監督法

一、舍監預のみにより自然に監督せるもの

高師　新潟(師)　奈良(師)　福井(女)　富山(師)

島根(女)　香川(私女)　廣島(私女)

二、帳簿により舍監檢閱するもの

群馬(女)　栃木(女)　靜岡(私女)　福島(師)　秋田(師)

京都(師)　京都(女)　奈良(女)　富山(師)　山口(私女)

愛媛(私女)　久留米(女)　熊本(私女)　鹿兒島(師)

三、又爲替券檢閱によりて便宜監督するもの

岩手(師)　秋田(師)　佐賀(師)

四、月計算表を家庭に報告せしむるもの

福島(師)　奈良(女)　小倉(師)　熊本(私女)

五、訓誨に止まるもの

高師　新潟(師)　宮城(師)　小倉(女)

六、別に規定せざるもの

千葉(師)　山梨(師)　和歌山(師)　廣島(私女)　德島(師)

長崎(師)

八、被服寢具を乾燥洗滌せしむる方法

乾燥

一、回數を定むるもの

(週一)　千葉(師)　群馬(女)　栃木(女)　京都(師)

京都(女)　奈良(女)　德島(師)　山口(私女)

香川(師)　小倉(女)　久留米(女)

(月一以上)　高師　新潟(師)　和歌山(師)　長崎(師)

佐賀(師)　熊本(私女)　鹿兒島(師)

二、被服は使用毎に乾燥せしむるもの

京都(女)　長崎(師)

三、隨意に乾燥せしむるもの

靜岡(私女)　宮城(師)　福島(女)　岩手(師)　秋田(師)

福井(女)　富山(師)　島根(女)　廣島(私女)

洗滌

一、日を定め又は回數を限るもの

新潟(師)　栃木(女)　群馬(女)　宮城(師)　岩手(師)

京都(師)　奈良(女)　和歌山(師)　香川(師)　久留米(女)

長崎(師)

二、隨意にせしむるもの

千葉(師)　群馬(女)　靜岡(私女)　福島(師)　秋田(師)

京都(女)　福井(女)　富山(師)　小倉(女)　長崎(師)

佐賀(師)　熊本(私女)

三、寢具は必ず年一回せしむるもの

新潟(師)　千葉(師)　福島(師)　宮城(師)　京都(女)

德島(師)　香川(師)　鹿兒島(師)

別に規定せざるもの

山梨(師)　愛媛(私女)　廣島(私女)

九、入浴の日時

一、毎日放課後より夕食頃までなるもの但し日曜日を除く

高師　千葉(師)　靜岡(私女)　香川(師)　佐賀(師)

熊本(私女)

二、夏季は毎日冬季は一週に三四日なるもの

新潟(師)　群馬(女)　栃木(女)　山梨(師)　宮城(師)

福島(師)　京都(師)　奈良(女)　福井(女)　廣島(私女)

山口(私女)　德島(師)　富山(師)　久留米(女)　長崎(師)

三、一週に二三日なるもの

岩手(師)　秋田(師)　島根(女)　小倉(女)　鹿兒島(師)

拾、家庭との關係

一、入學の際または式日等に父母兄姉を召集して說示するもの

高師　新潟(師)　栃木(女)　岩手(師)　秋田(師)
京都(師)　富山(師)　福島(師)　香川(師)　小倉(女)
久留米(女)　熊本(私女)△宮城(師)

二、便宜說明するもの
宮城(師)　福島(師)　京都(師)　福井(女)　和歌山(師)
島根(女)　廣島(私女)　愛媛(私女)

三、通信簿等により狀況成績等を通告するもの
靜岡(私女)　岩手(師)　京都(女)　奈良(女)　福井(女)
和歌山(師)　廣島(私女)　山口(私女)　香川(師)　小倉(女)
久留米(女)　熊本(私女)△栃木(女)

四、特に證人心得書を送付するもの
高師　熊本(私女)　和歌山(師)

五、年一回若くは二回父兄證人懇話會を開くもの
奈良(女)　福井(女)　△栃木(女)　△京都(女)　廣島(私女)

六、教員時々家庭を訪問するもの
熊本(私女)　年一回

八、別に規定せざるもの
千葉(師)　山梨(師)　長崎(師)　佐賀(師)　鹿兒島(師)

拾壹、新聞雜誌の制限

一、二三種の雜誌に限り許すもの
新潟(師)　群馬(女)　靜岡(私女)　宮城(師)　福島(師)
京都(師)　奈良(女)　和歌山(師)　廣島(私女)　德島(師)
長崎(師)　久留米(女)

二、一二の新聞を許せるもの
高師　新潟(師)　栃木(師)　宮城(師)　京都(師)
京都(女)　鹿兒島(師)

三、新聞を禁ずるもの
群馬(女)　靜岡(私女)　廣島(私女)　長崎(師)

四、明かに小說を禁ずるもの
福島(師)　京都(師)　京都(女)　和歌山(師)　愛媛(私女)
小倉(女)　佐賀(師)　鹿兒島(師)

五、新聞雜誌小說一切を禁ずるもの
熊本(私女)

六、舍監若くは校長の許可を受けて購讀するもの
山梨(師)　岩手(師)　秋田(師)　京都(女)　福井(女)
富山(師)　和歌山(師)　香川(師)　長崎(師)　久留米(女)
佐賀(師)

七、一定の室に備付け置くもの
高師　新潟(師)　栃木(女)　靜岡(私女)

八、別に規定せざるもの
高師　新潟(師)　千葉(師)　富山(師)　島根(女)
山口(私女)　小倉(女)

拾貳、學校以外の人に應接せしむる手續

一、先舍監の面會を經しむるもの
群馬(女)　靜岡(私女)　長崎(師)　熊本(私女)

二、舍監の認定のによるもの
千葉(師)　山梨(師)　岩手(師)　和歌山(師)　富山(師)
山口(私女)　德島(師)　香川(師)　愛媛(私女)　小倉(女)
久留米(女)　佐賀(師)　鹿兒島(師)

三、證人若くは父兄の印書或は證明書によるもの
高師　栃木(私女)　靜岡(私女)　宮城(師)　福島(師)
秋田(師)　京都(女)　奈良(女)　福井(女)　島根(女)
廣島(私女)

四、面會簿を供するもの
新潟(師)　千葉(師)　群馬(師)　福島(師)　京都(師)
奈良(女)　富山(師)　和歌山(師)　佐賀(師)　熊本(私女)

五、面會人を豫め父兄若くは證人より屆け置くもの
京都(女)

てなれつるつまの小琴をかきなでゝ
　ゆかしきねをやきかんとそ思ふ

いたつらに草の庵にたづれきて
　なく虫の音に身をそゆる哉

瀧頭餘感

感餘錄

與 逢

眞教育は男子の敎育と女子の敎育と兩者別途にして而して一道に歸するものなり、一道とは神の道を指て云ふ、古人神の字を釋して、「至貴也」と云者あり、ゆゑに吾れ在天の聖父母を呼て神と謂ふ。

夫れ男女子、其原同く天父母より出つ、ゆゑに男女の性は相關して別あり、而して又別にして相關せざるはなし、是を以て男子の精靈、其誠の愛の智に由て、神學に貫徹するに止まずんは、眞の女子敎育搆成すべからず。而して女子、眞に知るの愛に從て、至貴の神の旨を已れに體するに至るにあらずんは、眞の男子敎育は實行すべからず。眞知の愛とは、神に於ては統一せらる所の開發深愛なる生活を謂ふ。苟も是の兩姓相關して別あり、別にして相關する一而二、二而一なる、道に本つきて謹愼敎學するにあらずんは、社會の改新必ず成らず。其改新の成るを得べきは、必す先つ、人の是道を躬行實踐して天勢の運轉を贊する者有るに因る。今や假令天下の子弟を率ひて之を敎育し、驅て之をして精微の智識に進ましむるも、我れ若其心靈、至貴の神に於て一新し、而して形體、其道に由て再織を得るに及ぶを期するにあらずんは、終りに臨で悔吝せん。何ぞたゞ善結果なしと云ふのみならんや。

不吾之言

一、耶蘇基督は神也、

二、彼れは眞人也、二而一、一而二、即ち在天の父母なり、

三、或問ふ、彼れ爾を生める歟と、曰く、然り、何の爲に爾を生めるや、曰く、我れの彼れの如きに至るべきか爲め彼の顏を拜し、彼の前に悦び、彼の善に感し、彼の道を知り、賜はれる所の權を以て彼の旨を奉行し、而して彼の幸福を無窮に受けんか爲なり、

四、爾は何にたる、曰く、我は精靈たり、

五、我か今ま見る所の體は爾の眞の體たるか、曰く、否、此れ我か靈體の外衣のみ、

六、爾の外形、自ら其生命を有つか、曰く、否、我か精靈の體生けり、而してその生氣を外形に分つのみ、

七、爾の靈體は何に似たるや、曰く、我か外形に似たり、

八、如何に爾の靈體はその形體に因て行はるや、曰く、我か靈體は形體の目に因て外邊の物を見、その耳に因て外部の音を聞き、その口に因て味ひ、其胸に因て感し、その肺に因て息し、その腦に因て考え、凡てその用に因て外部に行ふものなり、

九、神は何の爲にして爾に靈心を與ふるや、曰く、我か彼(神)を愛し、萬の善を愛し、萬の誠を愛し、萬の善事を愛し、神の誡命を愛し、萬物凡て神の造れる所の者を愛せんか爲なり、

十、神何の爲に爾に靈知を與るや、曰く、我れ神を知り、漸を以て盡く正理を知り得るか爲め、又如何して神の誡命を守るを知るか爲め、如何して邪惡に勝て之を去てるを知るか爲め、如何して仁惠に進み、如何して益々人間に有用為るべきやを、今世并に今後に知るを得るか爲なり、

十一、爾の靈體は何の用たる、曰く、知と意(愛)との居る家の如し、

十二、靈體の健康とは何ぞや、曰く、その健康は全心を以て神を愛し、又其鄰を愛する己れの如くするにあり、我儕若し神を愛して其誡命を守れば我か靈心必す快樂なり、

十三、靈體の健康は神意を行なふを愛し、神旨を知るを欲し、而して深く之を悅樂するに在り、如此は靈體健康なり、

十四、何處に神は其誡命を書せるや、曰く、書して吾か心の中に在り、又我か精靈上の性質とその法律とにあり、又神の言にあり、

十五、其誡命を守る者、神之を愛するか、曰く、然り、如何に之を愛するや、曰く、其心の善情を長し、其神理を悟るの知を富まし、而して常に加增するに權の其(神の)旨を行を得るを以てせらる、

十六、右の外、誡命を守るの效驗は安くに在る、曰く、我か系統及ひ自爲の過惡漸を以て我心より去り、而して不誠なる者我知より逃れるに在り、如此靈體の不健康も漸を以て瘉ゆ、推して之を極むれば、形體の復生にも及ぶ、

十七、我主の救道は精靈、靈體、形體、並に救はるの道なり、

十八、我か主降世して我儕の中に居られ、彼れの意我意と爲り、彼れの知我か知となる、且つ、己れを忘れて完然神を愛するの際、我儕其鄰を愛すること己れに勝りて、至極幸福なる職務と生活とを得べし、此れは即ち地に在ても天と均しき光耀たり、

○狂者之言

古人有云、其志嘐々然曰、古之人、古之人、夷考其行、而不掩焉者、是謂狂、余嘗讀放言、亦似狂者之言、爲曰、大敵與我大力、故我常悦於大軍、夫大集之軍、其勢如天、其氣如日、散兵則雖百萬微少矣、天軍至而與義軍合耶、能使困者安、使囚者自由、而以愛情育之、以義和教之、大設軍也、夫天軍與義軍非一也、而所以扶開進者一也、非爲平和、則必不戰、必也爲平和、而後敢戰勝以和天下者、是義軍也、正氣凛々、巍然如峙視之、而不見聽之而不聞、凝集凝旋、以懾服千邦萬寓者、是天軍也、二軍相因以致其功、非通有形無形者、其誰能知之哉、

海外だより

米國事情

鵠村

◎大陸横斷

桑港より市俄高に到るまで二千哩餘、汽車三日半四泊の旅程なり。予はオグデン、オマハ等を經過するユニオン、パシフィク線に由りて彼に赴く。但し同行者の都合によりて、彼有名なる大鹽湖畔のモルモン寺院を一見し、且つ風光缺乏せる米國ながら、此處からはロッキーの山水秀美、空の色さへ他と趣を異にすと稱せらるゝコロラド州（コロラドとは色の義なり）を通ずると能はざりしは、實に遺憾なりき。尤もユニオン、パシイフイック鐵道會社の吹聽によれば、世界中にて最も美なる風景を有する線と稱すと雖も、吁、若し彼風景にして天下の絶美となさば、風光も亦た賴むに足らざらん。シイラ、子バタ及びロッキーの山脈も、予等の通過せし處は、たゞ禿々たる赭山にして、而も山峽溪谷を通ずるの感ある能

はず。ア、落機の山、汝の稱呼は、人をして、汝の奇岩峭崖より成れるものなるかを想起せしむべしと雖も、元これ火山岩より成るものに非ざれば、汝に於いて奇岩の名あるものも、風景洵美なる大和島根の人民は之を土壌の團りと認むるに過ぎず。

米國の如何に廣大無邊なるかは、小島國の天地に跼蹐する日本人、假令其狀を聞くと雖ども、之を實見すること無くんば、其大なるの量を想像し盡すべからず。汽車三日半の疾驅、乍ち人家の集合を見ればこれ都會なり、之を去れば、また漠々たる境域、殆ど無人の觀あり。從つて耕地尠く、荒原最も多し。此境の遂に全く開墾せられて、人畜稠密なるの日は果して何の時なるか。米邦將來の發達の實に恐るべきものなること、其地を見てこれを知るべし。

風景の缺乏すると汽車の疾走すると、塵埃の烈しきとにより、此間の旅行の苦痛實に甚だし。ことに夏向き炎暑の際などには猶更堪へ難し。寐台車に乗り、食堂、顔洗處、便處等の設備何の不足なけれども、いかなる船醉者も、これよりは無乃、船の安樂なるを思ふべし。予の如き素より汽車に醉ふ仲間ならねど、吁、二度は越えじとぞ心に盟ひける。

◎信仰治療

シカゴ市に於いて予の最も屢ば出入したる處は、有名なる信仰的治療宗の一大本山ザイオンなり。最も予は舊友の之に關係あるものを尋ね行きて、シカゴ見物上に、大なる便益を受けたる譯にて、直接此宗旨を研究する意向も無かりしが、出入多きに從つて、やゝ其實狀の幾分を了解するとを得たり。

既にクリスチアン、サイエンスの條に於て述べたるが如くに、米國には各種の迷信あつて、多くは、疾病といふ、人間の最弱點に附け込て、迷信なる敎徒を蒐集するものなるが、このザイオンの如きも、畢竟其類なるを免れず、而して其の首唱者ダウイー博士は、或は山師的人物ならずやとの世評を受けながら、信ずる者には聖人の如くに尊崇せられ、兎に角に一箇の人物たるには相違なく、而して現今米國宗敎界に一大問題となり、而も亦近日の如きは此處より派遣せられたる一宣敎師横濱に於て布敎を始めたりといへば、蓋し一觀察に値ひすべきものか。

ダウイー博士といへる、白髪の老壯夫は、濠洲に生れモト組

一九

合教會の宣教師にして、桑港に傳道せる際、凡百の疾病は、信仰と祈禱とを以て治癒すべしとの說を立てゝ、其主義の擴張に從事せしも失敗して、シカゴに來り、同じく此主義の擴張に盡力し、自から、神より祈禱によりて病を治するの權能を與へられたる使徒なりと稱し、此度は非常なる成功を奏して三四年の事業を以て、ザイチン　ホーム《信者の治療を乞ふ爲に來りて宿泊する處、一大ホテルの觀あり》ザイチン　タバナクル(寺院)ザイチン銀行、ザイチン學校《幼稚園より神學校に至る》を設け機關雜誌、時々の出版物を發行し而して又た信者より株金を募りて、此信徒のみ集合する、一市、ザイチン市と名くるものを設立せんとするの計畫あり、其計畫の如きは、ダウイー博士及び其秘書官等の間にのみ秘密に保たれ、所謂七十人の徒弟にも未だ發表されず。かくて此膨脹の結果財産の高總計二十五万弗に達し、博士一個人にて之を支配す。この多額の財産は何處より生ぜしかなれば、博士は、信徒たるものより金錢を吸收するに妙を得て、また病氣治療の爲に祈禱するには幾許の手數料を要すといひ、或ひはザイチン　ホームに宿泊するには、宿料高く、食品粗末なれば、多分の收益あるや疑なし。

博士は權威を以て信徒に臨み、また時に自から、人間以上の者なるが如くに稱する事ありとぞ。予のシカゴを去りたる後紐育ウォールド新聞によりて見れば、ダウイー博士は、其機關雜誌『醫愈のたより』の口絵より轉載したるものによれば、新約默示錄第一章第十三節以下に

七ツの燈臺の間に人の子の如き者あるを見たり、其身には足まで垂るゝ衣を着、胸には金の帶を束ね、首と髮とは白きこと、羊の毛の如く雪の如く目は火熖の如し。足は爐に燒くる眞鍮の如く聲は大水の響の如し。右の手には七の星を持ち兩刄の利劍その口より出で、面は甚しく輝く日の如し。

といへるを理想として、一畫を描き、其人の子とは、ダウイー博士の似顏にて、其足下には天下の万民來りてひれ伏す狀あり、要するに、博士自からを救世主の再來に擬するものなり、これ若し果して事實なりとすれば、神を瀆すの罪甚大なりと云ふべし。されば由來彼を攻擊するに務めたる新聞の如きは、此時こそと攻擊の鋒を銳くして、シカゴの物議を引

き起したりと云ふ。

市俄高毎日新聞の如きは、殆ど毎日の如くに、ザイチン及びダウイー博士の攻擊に熱中し、ありと有らゆる罵詈讒謗の言語を費やすあり、或は又た信者が病氣祈禱を願つて、醫藥を卻けたる結果、手後れして死したる爲に、跡に殘りし家族は迷信の夢より醒めて、ダウイー博士若しくは其弟子の祈禱に從事したるものを法庭に告發するものさへあれども、信徒は益々其數を增加するの勢を示すは、實に驚嘆の外無し。

予はダウイー博士が、其タバナクルに於て說敎するを聽聞したるが、これ果して說敎なるか、予は實に政談演說を聞くの思ひありき。儀式の一時間半も過ぎてより、三時間の長きに亘る演說あり、其演說の題目は『惡魔島に於けるドレーフフス、市俄高に於けるダウイー』といへるなりき。當時米國人民は彼ドレーフアス事件に熱中し、而して博士は市俄高を目して惡魔の巢窟とせるなれば、人氣引きの爲めに態々この奇題を撰びたると覺し。說敎中、演壇を縱橫無盡に亂れ廻りて雄辯を振ひ、而して聽衆は說に應してノー、ヒヤ、エースの聲拍手の音、實に喧囂を極む。計らざりき、苟くも敎會の名

ある拜禮場裡に於て、かゝる喧噪擾々の狀態を見んとは。ア、ザイチンの禮拜堂は神に接近して畏敬の念を起さしむる處に非ず。若し多くの米國敎會が社會的集會、客間集會の譏を受くるに適當すとせばこは全然一個の壯士演說會のみ。

ダウイー博士が如何なる魔力を以て信徒の上に臨むか、委細の事は未だ得て知るべからざれども、兎に角に信徒の心を籠絡するに甚だ勉むるものある形跡は、事々に其鋒鋩に露せり。假令へば彼が小兒の集會と稱するものは、基督が『幼兒を我に來らせよ』と曰ひし時の光景を擬せんとするものゝ如し。父母をして幼兒を壇上に携へ來らしめ、神の名によりて、我汝に祝福を與ふ』と云ひ〳〵接吻す。中には幼兒等、博士の髯面を摺り付けられ泣き出すあり、之を見て會衆の中に哄笑するものあり、狀態寧ろ滑稽なりと云ふべし。

疾病即ち彼徒が稱する惡魔よりの分捕物といふ、クラッチ杖奇形度、湯タンポ等樣々の病褥用器を以て四壁を飾り、また此敎を信ずれば死することなしと思ひてか、さ思はせてか信徒の擲ちたる生命保險證書を貼付したる、入場忽ち異樣の感を惹き起さるべし。

旅窓漫吟

在米 鉦下庵

君がおもかげ

あかぬは君がおもかげの
幾度みてもわが胸に
あやしき思ひかよはする
唯だまのあたりなつかしく
語りたまふとみるまでに

ハドソン河邊にて

故郷遠くまよひきて
世のうき事のわびしさに
語ふ友のなきままに
河邊を一人さまよへば
深き流はゆうゆうと
行きかふ船のしげきにも、

題しらず

つらき心のなかなかに
君知らざらげ今日までも
消えし思をそのままに
もやさでありし此胸の
君知らずしてありもせば

藻鹽草

想餘集《其二》

菩寛の子 有美

《準わさび集改題》

▲愛は武器なり、最も鋭き武器なり。

▲運動と作業とは熱を生ず。熱は其のものの色を變じて赤からしむ。故に、色の赤きは活動の意味を示すものなり。人の、赤色に悦ぶは、則ち斯の意味に悦ぶなり。

▲大聖人と大預言者とは、凡て大政治家なり。聖者と義人との所謂『道』とは、民を治むるの道なり。これを『政治』といふ。『政治』なくして『道』なるものあることなし。『道』は即ち『政治』なり。

▲人もし『想餘集』の記者が信仰と品行とを信じて、これに贈るに六百金を以てせば、六ヶ月を期して暫く狹斜の巷に入り、世の所謂蕩兒とならん。出で還るの日、其智慮、昔の彼れに勝ること必ずや六七百倍なるべし。

▲世に、氣の狹くして了見の小さき人といふものあり。こは嫉妬心の深きなり。

▲西鶴の文の簡潔にして、ダイヤモンドの如き鋭き光あるは、其學び修めし俳諧より來れるものならんか。

▲接吻の時、もし對手の唇の振え動くに氣付かば、その眞心より出でしものなるを知るべく、然らずは、そはたゞ一時の御機嫌取り接吻御世辭接吻なりと知れ。これドーデーが『サフオ』にいへるを祖述せしものなり。

▲我が戀する如き女には、餘所の男も必ず又戀し居るなり。

▲馬に蹴られたりとて、腹たてる馬鹿ものもなかるべし。然らば人に蹴られたりとて、腹たつべき所因なきに非ずや。人に蹴らるゝより馬に蹴らるゝ方、却て傷の大なるものあるを

▲女の古きを姑といふ。

▲向島の藝者長屋のうちに「安生堂產院出張所」と看板かけたるがあり。これは藝者共の墮胎を便にするためならんか。

▲歐西の畫法が、餘りに空氣透視法を重んじて、物理學的なるに飽き果て、今や之が反動として十五六世紀頃のフレスコ畫の色合と、古きエヂプト及ギリシヤ時代の線畫風とに傾かんとするものあるが如し。

▲然らば、今の西樂の餘りに和聲を重んじて數學的なるに飽きはてゝ將來單音を嗜好するが如き反動を生ずることなしとも限られまじ。

▲こゝに至れば、日本畫と日本音樂とは萬々歳なり。

▲戀の熱醒めし時、第一に氣にかゝるは、永き前その情人の許に遣はせし書簡なり。もしやこれを他の人々に示さずやと心も心ならず。

▲餘り多く愛せられたる女、或は男は、その變化として、我れの自ら進んで愛し得る如き男、或は女のあらんことを欲するなり。愛妾の間男騷きなど、即ちこの原理によりて說明せらる。

▲世界に起る大事件の多くは、其源を嫉妬に發す。

▲基督新敎は寒國の宗旨なり。其沒詩趣なるは、北歐風景の感化なり。然るに、天主敎の詩趣に富むは、全く暖國の宗敎たる故にして、猶ほ其山川草木の優麗明媚に且つ茂れるが如し。

▲「女を亡ふ」すなはち「妄」と作り「みだり」と訓す。古へより

女を亡へる人の心は亂るゝものと見えたり。

▲殺生石のありと聞く那須は、今も温泉のあるところにて、確か死火山なりしと覺ゆ。因りて思ふに、かの唐土より白面九尾の狐が渡來せりなどの噂專らなる頃、この邊に新らたなる硫氣孔を生じ、瓦斯の爆發力にて岩石を破壞し、そのうちより硫氣ムラ〳〵と立ちのぼりしため、かれこれ牽强附會して、殺生石などといひ出せしものに非るなきか。

▲凡ての人は、神の與え給ふ魔藥に醉ふて恍惚たるなり。故に、嬉々として其口を悦ぶ。なほクロムホルムを嗅げる族輩の、鼻歌面白く歌ふが如し。厭世家と自殺者とは、即ちこの魔藥より醒めたるものなり。自殺者の狂せるに非ず、厭世家の狂へるに非ず、世の人々の醉ひ狂せるなり。

▲他人の手前と思へば、恐ろしく威猛だかになりて、その妻を壓しつけながら、實は内所に入りて、一も二もなく「御座る」男といふものあり。至愚この上なし。妻を操縱する第一の法は、陽に之を崇め揚てゝ、陰に之を抑制壓服するにあり。然らずんば、これが亭主たるもの、遂に一生浮び上るの瀨なからんなり。

▲若き男や、世のクリスチヤンなどいふお目出度き輩の、女を崇め貴ぶは、これ其女の優れ秀でたるを崇め貴ぶにはあらずして、我が描けるさま〳〵の美しき妄像を其女の身の上に聚め、以て崇め以て尊ぶなり。故に、クリスチヤンの女人崇拜とは、これまことの女人崇拜に非ずして、女人の假象を崇拜せるなり。これを偶像崇拜といふ、亦可ならずや。

▲秋はこれ『天地自然』の大安息日なり。故に、秋の景色に似たる黛色に緑色を混ぜし如き色は、人の心を沈靜にして、これに靜かなる安息を與ふ。

▲强烈なる電氣の、能く金屬をして發光せしむる如く、誠烈なる精神は、其肉躰をして光輝あるものたらしむ。

▲夫婦も、つまりは他人の寄合なり。

▲嬰兒の、泣き或は呻るは、下等動物の「吠える」に同じ。

▲建築材料の物色をして、其光彩を發輝せしめんと欲せば、これと其地に於ける空氣の色との配合に注意留念せざるべからず。

▲女郎は一時に一人の客のみを相手にするもの故、一時に多數の客を相手にする藝者より、自然と其手腕鈍く、鍛煉の行

届かずして人を操縦する術に乏しき筈なり。

▲田舎生活は、男を驅りて自ら其妻子を切愛するに至らしむ。蓋し都會の如く其注意を惹き出すもの、些かも外圍にこれなければなり。我が心の知らず〳〵のうちに内にのみ向くと、まことに自然ならずや。

▲女の前にて、餘所の女の話など、夢にも口さきに出すべからず。必ずや、玉顔穩かならざらん。但し悪口雜言はこの限りにあらず。

▲古建築物のみにも限らず、凡て古物の趣味豊かなる所因は、永き年月の間に、其表面、風雨空氣等の破壞作用によりて粗雑となり、不平均なる凹凸を生じ、滑かなるところ失せて、光線の分配量全面に一様ならざるに至る故なり。語に『古色蒼然』とは、即ちこの謂にして、光線の分配一様ならずとの意に外ならず。

▲小供の、人の家に生れたるは、天の使の天降りしには非ずして、悪魔の使の生れ來れるなり。宜なる哉、これを産蓐のうちに窒殺し、或は胎のうちに水とするものあることや。

▲凡て日本の衣服は、角たちたるところ多く、甚だしく巧技に流る。されば、巧技を專らとせる髷は日本婦人の服裝に似合はしきものなり。殊に角たちたるところ最も多く、直線の總合とも見るべき肩衣を着けたる時に於て然り。是に於てか、女義太夫の束髪は、甚だ不格好にして醜きものなり。

▲"Chappie"は『お茶ッピー』に通ず。

▲巡査となるものは、巡査教習所に入らざるべからず。然らば、官吏たらんとするものの、官立校に入りて官風の教化訓練を受けざるべからざるは勿論なり。政府が、官立校の卒業生にのみ官吏たるを得るの資格ありとなすを見て、彼れ是れ是非の評論を試むるもの〻如きは、甚だしき野暮の骨頂なり。寧ろ官校卒業生は、總て官吏たるの義務あるものとするこそよけれ。

▲小銅貨は、金銀の大貨幣より却て能く世間に通用するものぞと、例のショウペンハウエルいへり。

▲西班牙再興の盟主ファーデ井ナンド王及皇后イサベラの娘にヂョアンナといふものあり。正しき白痴なり。されど、その子チャールス第五世は賢王なり。その父母賢にして其子賢ヂョアンナ獨り痴者なり。以て智と痴と如何に相近きものな

るかを知るべし。

▲義太夫に於ける三昧線彈手のカケ聲は、餅搗のアイドリの如し。

▲卵形は、美術生理により動眼筋の運動を解剖し見るに、甚だ苦痛を感ぜしむること少なく、しかも變化を與へて所謂美感を起さしむる形象なり。故に古き希臘の瓶類は皆な此の形を取れり。是に於てか、古來我邦に於て、美人顏の標準を卵形とするの、まことに合理的なるを知る。

▲人違ひせらるゝは、醜き人に多く、美人は永く觀し人の心にとまる。知るべし、『醜』の普遍にして『美』の稀有なることを。

▲趣味ある人とは、その視その聽たるものが、果して如何ほどの快感を、總ての聽者と視者とに與え得るものなるかを量り能ふの力ある人をいふ。

▲ショウペンハウエルは、厭世思想の多くは胃の病より來るを說きしが、多量の喫煙も又人をして厭世の念に沈ましむるものなり。少しく煙草を飮み過ぎたりと思ふ時には、何となく淋しき心の胸のうちに騷ぎ出でて、しみ〳〵と世の味氣なく哀れなるに忍ばるゝものぞ。

▲女は早く逆上し易し。生理的に於て然り、精神的に於て又然り。

▲女は凡て其のエラキものほど、嫉妬心深し。

▲『時間』のうちにありて、視また聽くものには、變化なかるべからず。『空間』のうちにありて、視また聽くものには、均一なかるべからず。

▲裁判官は『女學雜誌』を讀まざるべからず。

▲一人の力量家出でゝ、諸國を蹂躪することの如きは、ナポレオン第一世を以て終れり。露國の如き遂に怖るべきものに非ず。その狂暴にして廢れざらんか、列國同盟とセント、ヘレナ島とのあるのみ。

▲今や合衆國は、比律賓討伐を以て黨派問題たらしめんとす。災難なるは其島民なるかな。朝鮮半島民は國と國との競爭の間に挿まり、比律賓島民は黨と黨との競爭の間に挿まる。之を眞の犧牲といふ。

▲欠けたればこそ、世に時といふものゝあるなれ。新聞は何故世間の惡言惡事をのみ書きたてゝ、善行善事の吹鼓をなさ

ずやといふものあり、これも又野暮の仲間なり。悪言悪行なればこそ新聞の種とはなるなれ。善事善行には何の奇なく何の妙なし、到底新聞に載せらるべき資格あるものに非ず。見よや、如何に骨董の賞翫せらるゝかを。

▲『善魔の子』は、近頃藝者の研究に熱心なり。到底は地獄の火に焼き殺さるゝものなるべし。されど、地獄の火よりも恐ろしきは、吾讀者にています善男善女たちの怒なり。よりて、藝者に關するものは、凡て之を『中央公論』に送ることゝなせり。就て其八月九月十月十一月の分を見られよ。

▲基督の人類主義は、これ猶太の國民主義に反動せるものなり。なほ釋尊の、印度の血族主義に反動して、一切衆生皆な佛心ありと説けるが如し。

▲女は、凡て奥行ある智慮深き女を友とするを忌むものなり。されど、己れよりも淺薄にして甚だ簡單なる女とは、不思議にも意氣よく投合し、これは〳〵とまで睦しくなるものぞ。

《まだある》

花片繽紛　美人啼レ鏡
秋聲淅瀝　才子哭レ文

夏子の物思ひ

露子記

むしあつき夏の夜、たゞすゞしさを木の下やみの露にひろひ、消がたき星の光のおもひ、はかなく驚ろかさるゝ流れ星のをどろき、虫の聲あはれなる悲しけれど、やるせなき物思ひを斯く十分に歌ひ得なば本望ならめ、會者定離と敎えたる、かし不斷に相會ひしものならば暫らくの離れを忍びなん、會えども〳〵會ひつくしたるほどにもあらず、たゞ別れと云ふとの人なみすぐれて悲しきは、むごからずや、一日〳〵と過して少しは忘るゝとのあるべくも、忘れて慰さみとせんとは忍びざるなり、淺々しき人のおもひ、たゞ一と通りの交に屈托するやからは、かほどの歎きもあるまじきが、また斯程に相ゆるすともあるまじ、皮をやぶり、膚をやぶり、肉を合せ、心を一つにしての兩々のちぎり、終天終地とこしなえに相信じなば、百疑は朝霧の如くはれ、恨思は秋草の如くたえ〳〵ならん、秘密とは空恐ろしきものかは、天の秘密、地の秘密玄奥にしてふかし、人間互ひに聖なる秘密を結び、默して樂しみ、語らずして覺る、不言これ万々語、口開かず唇かた

くして胸中廓如、一天は晴れ渡るほどに吾胸にちとの疑がひ、ちとの滯ほりなくば樂しからん、嗚呼人世さはり多く、妨げ多し、吾ひとり紙に臨みて吾物思ひを心のまゝに寫さんとするに、尙ほ屢ば人の來りて靜思をきづゝく、嗚呼つれなき哉、こゝろ無の世の人よ、かろ〳〵しき哉世の情けなき輩らよ、卿等心うすく、なさけ淡く、苦もなく物思ひもなげに見ゆれど、我は其の翩々たるを浦山しとも思はず、たとひ終身を沈默に埋沒し、一生を孤拔にかぎり、百年相見るを禁じらるゝとも、もし我に信を托し我に身をゆるす人ありと思はゞ、そを固く望みにして斷えざるの苦痛を忍ぶべし、然し乍ら遠慮なく泣きたきほどに泣き、訴たえたきほどに訴え、何の容赦もいらぬほどに我心を紙にうつすとを得べき世界は何處ぞや、夜はたゞ與えられし自由の界、こゝに自由に夢みんとすれども、もしや夢中に叫びて人を驚ろかすとのなきや、嗚呼尤も早く我心を知れる涙よ、尤も深き所より我心をくみ出す涙よ、卿の自由に流れてわが心を解かんとするをだに忍びざる可らざるの世の中歟、あゝ〳〵忍びざる可らざるの世の中歟。

藝妓論

藩閥所殺の入水婦人
俠妓小万の哀れな悩み
千斛の涙灑て拙文を成る

朝天行

英國政界の大立物なる天降地湧の花役者が、曾て下院の新聞記者席を指さし、渠等は貴族僧侶以外、第三の大勢力なりと一喝したる、破的の警語を轉用して、わか交際社會に於ける藝者社會の地位を評せんか。手腕婉曲なる夫人奥方を始め、神韻漂渺たる令嬢姫君のほか、實に第三の勢力ならずむばあらず。而もその勢力たる、渠等が腕と愛嬌とを以て得る者なれば、その手腕の中には幾分か諸藝の奥義に、通達せるを意味すると共に、出沒自在の手練手管もて、此世の男を狂はしむる伎倆をも意味すべく、その愛嬌には啻に花の匂ひの如き、美さをのみ含むのみかは、その一媚一顰には傾世傾國の秘密を有するとも明瞭ならむ。されど是等を以て、或は其道に失敗したる破廉恥漢、若くは馬車馬流の道德家連が、幾らか爲にする處ありて、一丸忽に全身全靈を腐爛せしむる、毒氣紛々たる冷なる評語の彈丸を放つて、彼等を妖婦な

は今更の如く驚かざるを得ず。或は賤の緒環き繰返し、昔を今に成すよしもがなと高嘯して、鎌倉の威權に反抗したる靜御前の如き、その巍然嶄然たる意氣精神に於て、万古無窮の聖女烈女たるは識者の首肯する處に屬せん。而も渠等は當年の白拍子、今時の所謂藝者に幾庶きものなりき。然るに其時代に於ては性情の懦弱なる、女性中の女性ともいふべき、妓王妓女の如きすら清盛の冷情を唾棄して顧ざるは愚か、烈婦靜の如きはその斷腸の悲痛と、賴朝に對する反抗の氣焔を、炳然二首の吟咏にあらはして、人情史上の一大光彩なるを憶へは、渠等か如何にその理想とその品性の皓潔聖大なる者ありしかは、我等の思ひ半に過る者ありて存す。

これ實に當時の社會が、渠等の義膽俠心を縱横自在に活動せしめ、渠等の志操清心を高蹈脱逸せしめ得たる程に、健全强固なりしとは我らの識認せざるを得ざる處となす。されど今日此頃の社會は、既に全く背反せるを奈何せん。かの横濱の俠妓小力かその狷介矯激なる意氣精神の、この世の男に容れられずしく、英氣阻喪し、失望落魄し、殊更に浮世の味氣なさの身に泌みて、落花の痛恨を憶ひ、流水の懊惱を嘆ち、萬

り、悪魔なり、美裝せる夜叉なりなど唱ふるは、我らの怪訝に堪ざる處となす。

若し渠等か卿等の謂ふが如く、悪魔に髣髴たる者ならむには、渠等自身が求めて其處に至たるにあらず。墮落社會の反射が彼等の素行を貫して現はれたるに過ず。我は思ふ墮落社會の中眞は卿等にあるを、傲慢なる道德家と不遜なる情界の敗北者らは、ます〱社會を墮落せしむる者なり。始より卿等にして此世に存在せずむば、憐むべき藝者も憫むべき者ならで、實に立派なる淑女貴女烈女たりしならむ。藝者は此世に於て最も可憐なる受動的動物なり。渠等の傾世傾國の愛嬌も、手練手管の大手腕も、彼等が主動的に修養鍛煉したるにあらで、已を得す世の風潮に伴れて千變萬化したるに外ならず。健全なる社會には渠等と雖も健全ならざるを得ず。不健全なる社會には渠等は殊に不健全ならざるを得ず。試みに嵯峨野の露を踏み別けて、淨海入道の赫々活々たる威權を顧みず人情の浮薄を憤りて三界を出たる妓王妓女の哀を忍て見よ。哀と云へば哀なりと雖も、無絃に絶ざるの怨は長しと雖も、その高潔なる心情、雄大なる現象の輝けるを見れば、我

樹の花粉揪落して、粋人雅客盛春を忘れたる、天地人生の情緒酷薄なるを憤り、一塊熱烈の俠心を抱ひて、空しく墨河の淵に投ず。天に慟哭なく地に悲鳴あるのみ、星に聲なく水に恨み存す。あゝ當時の薄命婦人靜の前を一代の花役者たらしめたる社會と相對して、無量纏綿の感慨なくんばあらず。固より小力はその人物に於て、靜に相對し得る程の者にあらざる故、我らは小力の勢力を過大に誤認する者にあらざれども、而も今日の社會が一片稜々の意氣を有する、俠心義膽の小烈婦を顧みず、入水一抹悲慘の自殺を遂げしめたる者は、齷々萍々たる滑口才子を以て充滿する社會其物ならずんばあらず。俠妓小力を自殺せしめたるこの俗社會は、如何に意氣なく精神なく任俠なく、殆むど骨抜鰌の卵とじの如き者あるかを見む。然るに何事ぞかゝる社會が藝者に對して、妖婦悪魔美裝の夜叉など、天下無上の悪文字を弄し、自身は羊の毛の如く、雪よりも白き者の如く得々揚々たるは。痴々しさの限と謂ざる可らず。

前に言る如く、藝者は社會の、極端なる受動的動物なり。彼等はこの世智辛き鵜の目鷹の目の世の中に立て、虚僞の愛嬌なりとも开を唯一の武器として、此世の男を翻弄せざるを得ざるが如き、涙多き者なり。若し愛嬌の武器を棄てゝ、俠客的精神の發動を以てせんか、此世の男は尻に帆かけて逃るに至らむなり。あゝ厄介なるかな此世の男共、彼等に意氣精神あれば、之を唾棄して顧みず、愛嬌を渡世の甘き言葉を以てせんか、其弱味に附込みて落花狼籍の醜態を演せずむば已まず。故に香油、高帽、燕尾服などの此世の男共には、海に千年山に千年の痴者ありて、化物の正躰見たり枯柳の如く、妖婦悪魔美裝の夜叉の本躰は、斯る男の胸中三寸に潜みたるは明なり。今日の藝者か所謂半玉の時には意外に温良なる處女の如くなるに反し、美裝せる化物の鷹の目に觸れて、嫌々ながら手込に會ひ、始めは慄て戰きたる身の、おひ〳〵度胸を養はれて、兩三年も仕込まれたるのちは、全く別仕立の人間となりて、背に甲の生る程なる古狸となるは、渠等が半玉時代より姐さん時代に至る變化の行路に於て、認め得る處のものなり。されば此頃の藝者が夜叉の如く殘忍酷薄なるは、斯る手取者なる此世の男に仕込れたる結果なれば、極端なる受動的動物たる渠等の現狀に依て、今日の俗社會が如何に濟度

す可らざる者あるやを察するに足らむ。

既に藝者は此世の風潮を直寫する者なれば、わが俗社會の眞相は渠等の受動性を驅て、殆むど極端なる反映をなさしむるもの、譬へば新橋柳橋邊の藝妓の面影を拜みたらむ者は、彼等が花川戸の餘韻を汲める、東京兒の洒落にして小意氣なる、一種の特風を有することは否む可らざる事實なるのみかは、更に地を轉して室町公卿の遺風に染たる、洛陽の天地に至らむか、泥水社會の渠等に至るまで、何となくお姫樣然たる餘薫を止むることは、粹人雅客ならざるも一見識得するを得ん。殊に大阪の如きは黄金以上に美人なき社會なれど、大阪風の唯物的感化は、その粹を渠等の間に最も適實に描きおるを發見し得るなり。固より斯の如きは啻に三府に止まらずと雖も、最も參考とす可きものは、渠等が多く官吏の贔負を受れば、自然奥さん然となり、商人に贔負にさるれば嫁さん然となり、職人に贔負にさるれば嬶あ然となること是なり。故に渠等の間には瞑々の中に紳士向き素町人向き職人向きの變調ありて、幾分か各自の性情と趣味を異にするは、我らの注目を値する處に屬す。

渠等は斯の如く境遇に化せられ易く、殊に自から接近する男の感化を崇ると、實にすばらしきもの在り、故に此世の男共の性格にして脱化せむか、その男共の感化は自然彼等をして今日の狀態とは、全く一變せる境遇に導くことを得るなり。然らば當今の俗社會が自から蒔たる者を苅取に臨むで、曩に社會が卸したる種物の善惡を論せずして、單に果實に對して暴評を試むるが如きは、海に千年山に千年の痴漢どもが、危兵を放つて敵を翻弄し、その罅隙に乘して最後の精神生命たる、彼等の眞實を奪はむとするに外ならず。殆むど我が幼少のとき母の寢物語に聞ける、城のお堀にはお堀の主なる何万年も生ておる老龜ありて、お前が夫れに見込まれなば、水底に引入れたるのち尻の穴より首を入れて腹の臓を悉く抜きとるなりと謂へる如き、千古の悲劇は此世の男に依て藝者に對して演せらるゝなり。あゝ此世の男共よ、卿等にして眞に誠意誠心の人たらむか、俠妓小力は生ながら水葬の悲劇を演せず、郤て第二の靜ともなり得たらむ者を、我らは去て卿等が血と涙とを以て、その怪魂を一洗し來らむことを望む。

隨感

○年を思ふ萬感あり

年の來る待遠しき折もあり、年の立つ殘り惜しきともあり、年をきゝて特の外の老人と思ひし其の年の存外にも尙ほ若き、若しと思ひし年の知らぬ間に老年のたぐひに組入られたるに驚ろくなど、實に年は日月をもて算すべからず、たゞ人の心の感覺をもて算ふべし。而も、其の感覺のありさま如何に顧りみて、吾思ひの盛衰强弱をためす。むかし、聖人は夢によりて理想の進退を試ろみたりといへど、此は日々夜々の催しなるべし。歳々月々のきわみにつけて吾が心裏の模樣を測らんと、年に對しての吾が感覺を念ふに若かず。

○吁、其間の貯蓄

日、東に出で、一週して西に沒す、一日乃はち了んぬ。一日了んぬると三十たび、一月乃はち了んぬ。斯の如くして了んぬると十二回、一年既に過たり、二年亦過たり、三年乃至五年、その過ぬると何んぞ迅速なるや。試ろみに飜がえつて某の時機より今日に至るまで正さに何歲月ぞと問ふべし。經過せしとの驚ろくべく早かりしとを歎ずるならん。ふと之を財政の上に思ひ及せば、もし此の間、一日たゞ少々づゝを積みたるとも今はなか〳〵の巨額に達したるとを知る。但し此の認識は、黄白の數なるをもて其色明らかなり。當に推考すべし、道義品格の事も亦同じきとを。一日一善を積む、一月一善習をつくる、其の達する所ろ何んぞ少小ならんや。

○豈圖らん是天緣なり

十八九の青年、其の知れる家にて一女兒を擧げたるに邂逅せり。當時、呱々の聲を放つ赤兒に對して何の狀ぞ、其懸隔もまた遠しと云ふべし。豈圖らんや、此女兒妙齡に達するころ、昔日の青年正さに室を念ひ、天緣妙合せり。佳人十八九、才子三十又七年と云へり。如今何の懸隔かある。

○たゞ一死ある耳

其の生るる時は、等しく是れ赤兒。其の死する時は、等しく是れ白骨。天、輕重なく、地、厚薄あらず、一口食を入れ、二眼、山川を見る。其の生ける間に長短ありとも、長く生きて七十路にとゞくは稀れに、短かく存らふるも道を聞くの朝はあり。英雄、義に死するも一死、烈婦、貞に死するも一死、人本來二個の死なし。嗚呼何んぞ斷乎として價値あるの生命を取らざる。

○限りなき生命

人生五十、而も其の生き方によりては草木の如くにして絶ゆるもあり、亦、千百年につゞくもあり。夫れ、肉をまぢえ、慾をあやどりたる一生すら、斯る大相違を來すほどの生き方と發達とはありけれ。さらばもし人靈躰を具して而してのち十二分の生命に生きなば、かの永遠に存する大能者の天地に居て其限りなき住ひを爲すと豈に能はずとせんや。

○巨木語らず露を落す

亭々たる巨木吾が庭にあり、父祖以前より斯の如く高し。父も祖父も、吾兄も、吾も、吾妹も、皆な其近くに生れ、其下に遊び、其木影に物思ひ、其露にぬれ、其葉を踏み、而して亦た先だつて老ひ先だちて死せる多し。巨木、上より此の變遷を見て何にと感じつらん。口あらば左こそ其感じを述べたくやあるべからん。然り一種の口あり、一種の聲も放つ。左れど人と通ぜざる也。颯々たる其音、森々たる其調、何をか語り何をか歌はんとする。古より多恨の文士、之に同情を寄せて、人と草木との交わりを記すとや、故ある哉。それ、樹木を撫して默して語ると幾たびぞ。

○第一等の事

人苟くも世に存すれば、古今第一等の人を學びて其の眞相を覺り、古今第一等の事業を學びて其の消息に通じ、庶幾くはわが一生をして成るべき丈け之に近づけ、而して現在と將來との第一等の人に知己を求むると爲さん筈か。もし苟くも第一等の人に合し、第一等の事業を爲さば、他は畢竟小節目の事のみ、顧慮するに足らず、掛念するにも及ばず、久しふして自から成り、又久しふして自から解けん。

評　論

「瘠我慢の說」を讀む

福澤先生『瘠我慢の說』出でて、讀書社會騷然たり。其の騷然たる君子抑そも何人ぞ。惟ふに、世上具眼の士少なからず、讀過一遍、默して苦笑する所ろ果して如何ん。余は切に此般重厚寡默の國士其の人に向つて敎を請わんとするもの也。

夫れ、福澤先生一代に抗して重物拜金の說を皷吹せられしや久し、豪骨なきものの決して能くせざる所ろ、吾黨の輩、夙に先生此際の意氣に感佩し、未だ曾て其の門を履まずして而も其の氣節に服するとの久しきもの、豈に必らずしも先生此回の議論に向つて異とせんや。但だ來れし先生の皮相を觀て漫に論評を下したるの族『瘠我慢の說』を見て初めて珍とし、以て先生の別色となす。或ひは時弊の軟弱に慨して一時の客氣を求め、煽して熱し皷して激するの附元氣をだに尙ほ其の無きには優れりとするもの、妙に附和して識らず知らず此說の喝采を高くす。吾黨豈に只だ福澤先生の爲に惜むのみならんや、更に時代精神の萎靡の爲に歎ぜんとす。

蓋し、「瘠我慢の說」の主張する所ろ、大要二途あり。一は、勝先生早く敵に降り、一戰にも及ばずして主家の城を明渡したる腑甲斐なさを駁するなり。二は、其事反つて奇功を奏し類ひ稀なる好結果を得たりとするも、晩節身を引いて武士道の終を潔ようせざりしことを甚しき遺憾とする也。余輩讀んで其文に臨めば宛から常山の蛇の如し、暫らく瞠睹として首尾連結の妙なるに歎ぜざる能はずと雖ども、則わち是れ一種の情熱を諒として、文の火の燃ゆるに見るのみ。久しからずして理想之を可かず、情義之を容れず、靜思して遂に一篇青年客氣の筆に對すると同日の感を催すを奈何んせん。夫れ作者盛んに瘠我慢を以て立國の大本となす、此の見すでに大道に外るるを思はざる可らず。我慢の氣は、自負の心なり、氣慨之に發し、獨立之に根す、素より立國振作の一要素たるに相違なしと雖ども、たゞ此の一を以て建國唯一の大本と見做すに至つては、豈に君子の首肯する所ならんや。立國本來、私にあらず、天下の公道なり。たとひ其の建造の過去に於

て、私の事實ありとするも、其の現在の理想に於て之を私の爲とするとは、人の觀念の服さゞる所ろなり。事に臨んで去就を決するの際、私を以て國家の大事を斷ずるとは、凡士も尙ほ爲さず、況んや大人をや。作者先づ此の前提を置て海舟先生を評せんとするは、其の冒頭に於て既に懸崖の差違あり。曰く、「勝安房氏の輩は幕府の武士用ふ可らずと云ひ薩長兵の鋒敵す可らずと云ひ社會の安寧害す可らずと云ひ主公の身の上危しと言ひ」て早く敵に降れりと。而も、勝氏果して斯の如き言論ありし乎。勝先生江戶城明渡しの意衷豈に容易に忖度すべけんや。然れども作者が見て以て斯の如しと言ふ所ろのもの果して何の證跡にかよれる。余は勝先生當時の言論と文筆とに見聞して、先生當日の意氣決して如此きものにあらざりしことを知れり。夫れ、江戶城既に明渡され、大勢既に一去し、僅々たる浪士東台小丘の上に屯するものを擊つに方りてすら、官軍決死の態度眞に業々しからずや。もし駿遠の濱に橫擊し、函嶺の嶮に逆擊し、居然千代田城に據つて官軍の書生を擊たば、たとひ十二分の勝算なしとするも、九分の敗算あることなし。是れ、大阪城に於ける官軍の諸參謀が深く懼れたる所にして、其の容易に東海道を上らざりし以所なり。當時武裝したる軍艦を尤とも多く有し、訓練したる陸兵を尤とも多く有したるは幕府なり、幕府當日の戰情に於て豈に初めより勝算なしと言わんや、天下の人十中の九皆な其の勝算を疑がわざりし也。故に慶應四年二月幕府大廣間の大評定に於て、和戰の議論數日決せざるの際、勝先生が主公に建白する所のものは、其の勝算なきの故にはあらざりし。只曰く、

凡そ興廢存亡は氣數に關す亦た人力の能くすべき所にあらず。今もし戰に決せば上下唯だ一死を期する而已。臣軍艦を督して駿州の海濱に出で上岸二三百の兵を以て官兵を拒ぎ候は、我兵衆寡敵せず一敗せん、其敗に乘じて敵兵淸見が關近傍に逼らば軍艦を進めて橫に是を攻擊せむ歟、極めて敵を破ると必せり、即時我が兵を增して接戰し艦より敵の中央を破らば、反掌の間必勝せんと疑なかるべし、此機に乘じ關東の士氣彌奮はゞ直ちに海道の味方を督責し、火を放ちて敵の來往を妨ぐべし、然らん后に軍艦三艘を率ひて攝海に乘入り、西國中國の海路を絕て、しばらく天下の變を伺はむ歟、總督の兵敗走せば、他二道の官兵施こす策を失はむ、また上國海路をたゝれて運送自由を得ざる時は、如何ぞ他に策を行はるべきや。然れども是より天下瓦解し九州の侯伯英國に通じて其志を逞くせんとする歟、實に其行く處を知らず。然らずして天怒を恐れ、天戮を仰ぎて順々として條理を踏まんと欲せば、王難重り到り、終にまた其の終る所を知らず。唯だ臣等君上の御决心を拜承して一死を以て率ずべきなりと

（海舟日記、幕府始末等）

嗚呼、嚱々として同胞相戰ふ數年、勝敗久しく決せず、只だ天に循がつて運を待つ、而して最后に決する所何事ぞ。此が爲に買ひ得べき所ろ一の瘠我慢にありとして、作者倚ほ慶賀せらるゝ乎。且夫れ、福澤先生の家康を見、幕府を見、維新の變革を見らるゝ所ろ、頗ぶる勝先生と見解を異にするが如し。福澤氏は、家康が開運の基礎は瘠我慢にありとせらる。是れ「高義能く待ち、隱忍能く修めて」以て立家の基礎としたるとを見る勝先生の意見とは全然根抵を異にせり。勝先生が速やかに江戸城を明け渡したるの極意は、宗祖家康公の精神に則とられたり。然るに必敗を期するとも倚ほ城を枕にして打死し以て天子に抗する是れ三河武士の本色とすと云ふ、然り是れ三河武士の爲には本色ならん、以て家康の主旨なりとするに至ては、大耳翁を見る寧ろ小なりと云ふべし。嗚呼古より英雄素より猾なり、然れども、猾を以て英雄の本色となすものは斷じて不可なり。家康、勤王を以て家憲とし、愛民を以て家法とす、天朝に對するの處置、未だ決して薩長史家の言ふが如きものにあらざりし也。勝先生、遙かに宗祖の尤とも美なる家憲を顕昭し、幕府建造の大主旨に復り、卓然無私能く德川氏の大精神を發揮すると、區々小丈夫の勇に驅られ、權助の俠骨に加擔して以て瘠我慢の死に殉ずると、何れか德川氏の爲に忠なる。凡そ慶應明治の交、德川氏の士にして瘠我慢なきものは稀なりき。たとひ盡忠の王臣たらざるとも全義の幕臣たらんとは、江東八千の少年が皆な口にする所ろなりき。此の日、瘠我慢を爲すは易く、瘠我慢を棄るは難し。勝先生をして何んぞ城を枕にして打死せざりしやと言ふは、何んぞ其の易きを爲ざりしやと言ふに同じ。癇癖殆んど狂に近く、負け嫌ひ骨髓に徹し、一死尤とも易く、素と初めより生地あらざりし勝安房守たるもの、其の尤とも耐えがたき屈辱を受け、芋堀り武士に膝を曲げて、敢て和を議するの苦痛は、其の屠腹するだも倚ほ爲しがたき所ろに近し、而して先生の能く之に耐えたるもの豈に大に信ずる所ありてにあらずや。且つ夫れ、江戸城明け渡しは眞に明け渡しなり、降を乞ふにあらざる也。江戸城は是れ德川氏の城にあらず、天下の府城なり。德川氏既に政權を奉還し、幕府を解く（其事、實に伏見鳥羽の開戰以前にあり）、江戸城を開いて、政府の史籍を讓るは素と當然の處置とす。たゞ夫れ一時

の衝突と、事理を没却するものは暫らく擱く。凡そ當日の變化に際するも能く靜かに本末始尾を勘査し、卓然大義に復つて、國体の主意、天朝幕府の臣義に顧り來らば、既に一と度び大政を奉還し、既に一と度び錦旗に反抗し、既に官軍道を上り、主公恭順に决するの際には、政府を明け渡すは內閣を渡すに均しく、江戶城を讓るは內閣文書の引續を爲すと何んぞ擇ばん。當日混亂の時節に於て早く此の大道に從がつて大義を了するを得たる尤とも欣ぶべし、何んぞ特更らに瘦我慢の陋態に下れとは言ふや。福澤先生は、僅かに瘦我慢の振作を以て士風を万古に維持せんと言ひ、而も勤王奉公の大義に殉ずる精神の發揚を杜絕するとを憂ひず。茲に勝先生が「家康の美なる精神に有終の美あらしめ、德川氏幕府の主旨を明瞭にし、政府內閣の私しすべからざる所以を敎訓せんとしたる」微衷を悉とく擯斥し、賴いに万死一生を得、天幸不思議に下り、其の結末の無類に好結果なりし所以をも忘却せしめ、凡そ此等の苦心此等の事相を抹殺して士風の感化に益あらしめんとはせず、單に瘦我慢なき一事を駁して以て筆頭に瘦我慢の說を鼓吹し、之に賴つて士風を長久に維持せんとすと言ふに至つては、やゝ異樣の感なき能はず。又、維新以后、勝先生の晩節を全ふせざるを惜しむの后段に於ても、筆法依然、尋常の規絆を脫せざる、何事ぞや、頗ぶる達人の爲に取らざる也。抑そも、江戶城を明け渡し、幕府を解く、敵と戰ひて敵に降るの主旨とせば當に引退高踏して自から潔よくするも亦た妙なるべし。然れども、其の城を渡し、內閣を讓るの主旨は、戰ひに負けたるにあらず、陛下御委托の大權を奉還し、之よりして御親政の擧らんとを奉觀すべき機運に立てり。人因て薩長の野心に外ならずと言はん歟なれども、其野心のまゝに陛下を委して以て王政一新の美を沒せしむるに放任すべき乎。人の野心は万古常にあり、たゞ此の野心を惡むの故に、陛下御親政の汚濁せらるゝを冷眼視する能はざる也。此時に際して、所學を沒し、高踏勇退して全く世の爲に用いずと云ふもの、眞に大丈夫の安んずる所ろ乎。但だ夫れ士の自から薦めざるは固より其の所ろ也、然も前代臣節の名の汚れんとを慮ばかり、拘々として白髮遺臣の芳名を全ふせんとする、寧ろ小ならずや。もし尋常瘦我慢の士を以て言へば、新政府の無經驗、事々

に究困するの狀を笑ひ、指ざして以て一輿とするも亦た意氣地なるべし、而も作者は尙ほ之を高しとする乎。夫れ幕府の臣たりしものは悉とく舊時代の士風を守つて老死し、明治政府に初めて仕へたるものよりして始めて今樣文明風の勤め振を行ふべしと言ふ乎。勝先生の如き、一面、幕府をして終わらしめて、他面、明治新政府を開創したるもの也。之れ當時に在つて兩端を持するの疑ありたる所以にして、作者の尙ほ或ひは以て臣節を全ふせざりしものと爲すやを知らずと雖へども。何故に、勝先生たるもの、其の一生は單に幕臣たる流義の行動に留まり、更に幕府新政府の過渡を成就せしめべき一大事業に從事すると能はざるものたるべき乎。又何故に、一旦德川氏の祿を食みたるものゝ中に於て此の如き事業に從事するときは、其勝氏たるとたらざるとを問はず皆な臣節を全ふせざるものと見做し得る乎。吾輩を以て見れば、勝先生は、城を明け渡し、內閣を讓り、陛下の新政府をして容易に開始せらるに至らしめたる維新の變革に對しては、寧ろ創業贊助の責任を有せり、何んぞ之に多少の助力を與ふるとを辭すべけんや。左れど、先生亦た本來の關東武士なり、其の理性に於て如此く明白に自から意識するに係らず、其の情感に於ては、固より明治政府に仕ふるとを好まざりき。其の尤とも安んずる所は、敢て政談を辭して緘默一言を吐かず以て前代遺臣の好風狀を維持せんとするにもあらず。如此きは、熱血先生の如き人の爲し得ざる所ろなり。左れば亦立朝堂々驅馬に御し、得意權勢を擅ひまゝにせんとするにあらざりしとは言ふ迄もなく、明白なりき。則はち、先生の任ずる所は、無名の功を盡し、無跡の事業を了し、陰に明治新政府の爲に助力して、陛下當年の大志に翼贊し、亦以て德川氏奉還の主意を完くせんとするにありき。左れば、德川氏一門並に其の舊幕門下生に告ぐる所は常に斯の如くなりき、曰く、幕府を明け渡し、則はち責任了せりと意ふ勿れ、一朝、陛下御迷惑の日は、如何なるとにても再び任じて奉公の勢を盡さゝる可らず、爲めに深く備ふる所なかる可らず。陛下再たび御命なき間は、全力を盡して今の政府を介抱し、苟くも其の迷惑となる勿れ、苟且にも今の功臣等が維新當年の所志を忘れて、同國の士互ひに相ひ妨ぐるが如き醜態を爲す勿れと。左れば海舟先生の望む所は、官に立つにあらず、野に隱るゝにあら

ず、悠悠自適、自から高くして風流に托するにあらず、只但だ名利の地を謝して以て邦家に報ひんとするにありし也。此心、先生に親炙せし者の、皆な眞に諒とする所ろ、而して先生が屢ば高官に要められて屢ば辭し、止むを得ず之に就くも速かに辭し、其の伯爵と恩賜の金の如き、其の華族と其の殊遇の如き、其の一と度び受けて遂に之を棄て、故さらに伯爵勝家を斷絕せしめて、事實に爵祿奉還の終を遂げられたる如き、もしくは、官俸一錢を私せず、悉とく散じて苟くも私事に用ひず、生平自から持するの薄き、柱傾むき、衣破れて、而して尙ほ當らずとせられたる、蓋し廿餘年氷川を訪はざりし福澤先生の想像以外たりし。嗚呼、晩節を飾るの難き江戶城明け渡の難きよりも難し。吾黨が海舟先生の苦心尤とも明治以後に於て多しとする所以のもの是れ也。初め福澤先生の「瘦我慢の說」を木村芥舟翁に托して勝先生に致さんとするや、翁可かず、後ち人に托して送る、勝先生の答書に曰く、行動は我に存す毀譽は他人の主張我に與からず我に關せずと。余一日亦た此事を以て先生に問ふ、先生曰く、儒生の論ずる所は大率ね古より此類なりと。殆んど意に介せざるが如くなりき。夫れ、千古知己の情洞然として默契の裏に存す、勝先生の苦衷の如き、豈に言論の能く闡く所ならんや、又豈に言論の能く消す所ろならんや。

因みに言ふ、時事新報一月廿五日、「瘦我慢の說に對する評論に就て」と題し、碩果生の文あり、蓋し亦た福澤先生の說なり。其要、勝先生の行動、當日外强の干涉を引んとするとを憂ひたるに因るとの辯論に對し、細かに幕末諸公使の逸話を擧げて、當年實際に如此き憂患なかりしとを辯ぜられたり。然るに例證專ばら些末の事件にのみ偏し、其の能く幕末の外交事情を辨ずるに似て反つて老翁細事を喃々するの態にのみ陷いりたるは惜しむべき也。就中、小栗上野の事を記し、「彼が外國の力を假りて政府を保存せんと謀りたりとの評の如きは決して甘受せざる所ならん」と言へる如き、「上州が佛蘭西より金を借らんとしたる一大事實などを殆んど忘却せられたる如し。健忘も甚しからずや。此事、上州の自から明言したる證跡の顯著なるものあるのみならず、福澤先生の如き栗本氏に親交ありたる人の尤とも委曲に承知せられべき筈ならずや。況んや、官軍、慶喜

公を責むるの文、大逆無道の一句は、其の外國と連結せんとしたる一事を指せるは、當時の消息を知るものの默識する所たるをや。夫れ、幕府にして佛と結ぶ、彼に南洲ありて辛ふじて英國の干渉を斥ぞけたりと雖ども、官軍幕府干戈に見ゆる數年の間には、少くとも先づ財政上の一點よりして遂に外國の干捗を來すとありしは明白なり。勝先生の遠識早く此の干捗を憂ひたりと言ふ所のものは、其の僅々一二ケ月の間に兵馬の際に發すべき淡泊なる干捗を指ざしたるにあらざるべき也。又ペルリが渡來して開國を促したる最初の目的は單に薪水食料を求むるの便宜を得んとするに過ぎざりしと言ふに至ては、抑そも何の證據によりての立言なる乎。殆んど當惑の外なき暴論なり。

家　庭

女は家庭の女王なり

山下石翁

「女は家庭の女王なり」。いかにも女王である、女王と言つて差支えはないのである。然し、如何にして女王となられる乎と云ふことを能く心得て居らねば、飛んでも無い間違をするもので。中には、如何にして女王となられる乎と云ふことに考がへ付もせず、また、其の女王となるに必要なる道をも盡さずして、たゞ生れ乍ら自づと女王の資格を有つて居ると思ふものもあるゲナ。甚はだしい大間違へである。

すべて、王の王たる所は、其の能く治めることにある。たとひ王たりとも、人之に服さず、國家紊亂して王の威德行はれずんば、名は王といふと雖ども決して王ではない。王たらざるの王は、王と言ふことの出來ぬ筈で、たゞ獨りぎめの關白太政大臣が何の役にも立ぬと同じで、万民の心服せざる王は、王にして王ではないのである。

左すれば、一家の女王と言ふときの眞の意味も即はち是れで、其人によつて一家治まり、其人によつて一家和らぎ、一家の泰平和樂が其人によつて來ると云ふに至り、初めて此人が一家の王となつたので、夫が女であるから、即はち女王と申すのである。

然し、一家はどうして治まる乎。叱つたり、壓制したりして眞の治めが出來ぬとは、天下何處も皆な然りであるが、家庭に於ては、就中左樣である。衆の感服し、ミンナの悅服するは、たゞ小言を聞くの故でない、こはいからでない、威張られるからでない、たゞ眞に心から服する故である。

左樣なる悅服は如何して出來る乎と云ふに、人の尤とも嫌がることを爲し、人の尤とも好む所を捐て、功を他に讓り、惡名を自から背負ひ、椽の下で力を盡して毫も惡るい顏をせぬときは、如何に强情我慢の人でも遂には感服するに至るものである。此人が無ければ、爭そひが絶えず、此人が無ければ家も和らがぬと云ふに至り、即はち此人あるによりて一家が能く治まるのである、コヽが取も直さず女王の女王たる處である。

汝、人の主たらんと欲せば先づ其の僕たれと云ふ金言もあるが、女が家庭の女王たると云ふ西洋の諺をきいて、たゞ先天的に女王になれるものと心得、ふところ手をして居ても、女王たるの權利は附屬して居るものと思ふに至ては、以ての外の心得違である。

夫故、女は女王とならねば成らぬ、然し女王となるには夫丈の獻身をせねばならぬ。女は一家を治める中心とならねばならぬ、然し其の治めるは權力によるのではない、たゞ自から人に優りたる苦勞をするからであり升。

○辨慶と貞女節婦

昔し大名の集まりにて、辨慶が欲しひ〳〵と言ふものありき。人々之に和し、實に尤もなり、今にも辨慶ごときものあらばいかほどに氣丈夫ならんと申すに、某侯ひとり戒しめて曰はく、諸君は辨慶をもとめて辨慶の無きとを痛み玉へども、余は辨慶をして辨慶たらしめし義經の無きを惜しむ、もし身先づ義經たらば、百の辨慶を致すこと難からんやと。眞に、これ卓論なり。

之に因みて惟ふやうは、貞女節婦と云ふもの、其女の必らずしも獨り善きにはあらず、之をして貞女節婦たらしむる良人の等しく善ければ也。孝子は慈愛ある親のいつくしみによりて出で來る、貞女節婦たるものも冷酷無情の良人によりて造らるゝものならんや。

斯く言はゞ、一種の道義先生は憮然として之を異端の功利說と言はるゝなるべし。左れど、人情の幾微、人心の感應に就いて實地を研究せば、前に云ひたるとの、あながちに不善ならぬよしを悟らん。

尤とも、人心自然の疎野を矯め、理想に向つて強いて修養せしむるが即はち敎なり。人はたとひ情によりて動き、情の温かなるによりて感激身を致すものとするも、左なき時に尙ほ身を獻ぜんとするほどに訓育する、亦一種の敎えなるべし。故に親頑なりとも子は孝なるべし、夫、慘なりとも妻は貞婦なるべしと敎ゆるも、固より亦必要なり。されど、たゞ〳〵かゝる命令を其の劣者に向つて嚴命するのみならず、同時に優者に向つて其敎を與へよ。曰く、親もし慈ならざれば子の孝ならざる寧ろ當然なり、夫もし愛ならずば妻の貞節ならざる亦寧ろ理由ありと。

雑録

育兒の注意

醫學博士　三輪信次郎氏談

●赤兒が生れても泣聲をあげぬものがあり升、之は早速、醫者に見せねばなりませぬ。

●又、肛門閉鎖と申して、便口の塞がつて居るものもあり升斯樣な赤兒は、胎糞も下らず、三四日も立つと、腹が太鼓の樣になり、口から糞汁の如きものを吐くに至り升。之は少しの外科手術で直るものであり升。

●マクリを飲ませて、胎毒下しをすると云ふ古しからの習慣があり升が、之は爲ぬ方が善ふ御座い升。反つて不消化病などを起す元となり升。

●牛乳や、コンデンスミルクなどを用ゆるは第二のとで、母の乳が尤とも善く、其次には乳母を雇ふべし、此の天然乳養が出來ぬとき、止むを得ず、牛乳やミルクに賴るべきです。外國の如く、牛乳の取締の嚴しい所で、牛乳の質に間違への

ない所ろでさへ、既に夫を次にして天然乳養に出るべきとに一定して居る程であるのに、我國の如く、牛乳の不良なる所では倘更のとです。又、コンデンス、ミルクは多量の砂糖を混ぜてあるもので、固より初めから、赤兒の乳養を目あてに造つたものではありませぬ。

◉牛乳やミルクを用ゆるとしても、水の割り方は、是れ迄、餘り淡すぎるとが行はれた樣です。私の說では、水二に乳一より、水三に乳一ぐらいにするが宜しう御座います。

◉マクリで胎毒下しは出來ませぬが、實際胎毒をうけた子があり升、即はち先天性梅毒をうけた子で、親の花柳病が遺傳したのです。コンナ赤兒は、顏が黃色で、耳の附根や、唇の角にワレ目が出來て居ます。素人の目にもよく分ります。早速醫者の治療を受させれば、隨分直ります。

◉三口の子が折々生れます。三口にも色々あつて、唇の割れた丈のもあります、之は縫でもして直るとがありますが、甚はだしいのは、喉の裏が割れて、原語に狼の喉と申すほどの狀態になるのもあり升。之は醫者に見せて、扱かひ方を能くせぬと、乳を咽の方に飲込んで肺炎を起すとなどが有升。

新刊書

○世界冒險譚を讀む

長江

第一編　金堀少年　　第四編　續遠征奇談
第二編　遠征奇談　　第五編　決死少年
第三編　二勇少年　　第六編　殖民少年

我社の櫻井鷗村君嚢に米國に遊ぶに先だちキャプテン、リードの「初航海」と名くる冒險小說を補譯して、少年子女の好評を博せしが歸朝後また譯す處の海外少年冒險小說の類を譯述して世界冒險譚と名づくる叢書となして陸續出版せんとし既に其第六編を出せり。

それ英國の如き一小國を以て能く宇內に雄視するに至りたる所以を探れば、畢竟これ彼國民が冒險的精神に富めるに起因するものと云はずんばあらず、而して彼國の教育的小說家は盛に少年子女の爲めに冒險小說を著して大に其精神を鼓舞するに勉む、彼ロビンソンクルーソー漂流記の如何に英國人を感化するかは今更論ずる迄も無くデフォーに次で近時大家の名を成したるものにリードあり、マリアットありまたヘンチあり其他殆ど指を屈するに遑あらず、米國の如きまた其他歐洲諸國の如きも又敢て英國に讓らず、當代の文豪の名あるキプリングが大名を成せし所以のもの一には彼が帝國主義を奉ずるに基くと雖も、また其好んで著す處の冒險的小說預つて力無くんばあらず。

我國民の精神に最も欠乏する處のものは、冒險的思想なり、鎖國の昔ならばイサ知らず方今國を宇有の環視中に立つる以上は、國民をして大に冒險的精神を奮起せしめずんば、武力實力共に其發達を期し難し。然るに之を養ふの要素亦極めて乏しく、多くの文士ありと雖も未だ冒險小說によりて少年子女の教育に資せんと期するものあらず、然るに鷗村君が鞭を之につけて、彼の名著を我に移植せんとするの勞は實に多とせざるを得ず、之を例として文士並び起ちて冒險小說に鍬を取るに至らば、少年の教育上大に裨補する處あるべし。嚴谷漣君の御伽譚に次いで必ずや來らざるべからざるものは冒險譚なり、之を海外の例に見るも實に然り

となす

今其既に上梓せられたる六册を見るに、こは皆な難を排して功を奏したる冒險物語にして、小說の躰其宜しきを得、外國語を翻譯するに當りて、巧なる言文一致を以て之を日本趣向に投ずるやう補足し翻譯物を讀む感なからしめ、奇を呼び快を叫ばしむるもの甚だ多し、許し家庭にて讀むべき純良の小說乏しき今日かゝる書を出版するに勉むる譯者及出版者の労を謝せずんばあらず

（博文館發兌　定價卅錢）

○冠詞例歌集　末松房泰編　博文館出版　定價廿五錢

編者末松氏は末松文學博士の縁戚にてもあるにや、伊藤大勳位殿の題辭をさへ添へたり。されど、溫飩粉をこねりし如き緒言にては、此書の功能の果して那邊にあるものか、ちと納得し難し。これを編纂の法に於て調ぶるも、あまり有用なるものとは見受けられず。若し出版者にて損失を招かざりしならば多大の幸福なりと人の痛氣を頭痛に病めど二千有餘軒の貸册店ある博文館のことなれば、これでも二千册位は賣りたるべし。誠に以て編者冥利なり。但し、オマケ分のためとて本文の前に揭げし「和歌和文に就て」なる末松博士の演說と、附錄に添へたる同博士の先君に關する久良知氏の談話及「靑萍先生一夕談」などいふものゝ方が、定價廿五錢中の廿錢を値する樣に思はる。（ＡＢＣ）

○日本土地經濟論　角田農學士著　裳華房發行　正價參拾錢

篤學なる札幌出身學士の著述になるものなれども、さして卓拔なる識見の此書中に充實せられ居るに非ず、何處に行くもコロ〳〵と轉りある石コロの如き代物なり。されど著者がこの書を公にするまでには仲々の苦心を重ねたるものなるべければ、概略その所說を紹介せんに、先づ土地利用の道を講じ國家の財政を裕にせんとするには、（一）農耕地の區域を擴張し、これがため（Ａ）畑地の開墾を計りて麥粟等穀の耕作を奬勵し（Ｂ）もし所在の草原地にして地味瘠薄農耕に適せざるならば、暫く林業を營み土地を肥沃ならしめて後農業を營み（二）秣場の改良を計り、特別の事情あるに非ざれば原野は凡て之れを牧場或は秣場として民有に歸

せしめ（三）森林の植樹を謀り、諸方に點在する小面積の官林は悉く民有に歸し官林經營の本旨を以て（Ａ）保安林の造成（Ｂ）瘠地の保護（Ｃ）大材の產出の三大主意とのみなし、遂に全國を舉げて

農耕地　八、六七九、六〇〇町　牧秣場　三、八三九、八〇〇町
森林地　一〇、一二六、六二〇町　不生產地　五、七八六、六四〇町

の理想域に達せんとするを望むにあるものゝ如し。たゞ著者に薦めたき一事あり、即ち單稅論の研究是れなり。（素讀生）

○近世名匠談　森大狂著　春陽堂版　定價廿五錢

この書の題の「近世名匠談」なりといふを聞ひて、こは近世の建築師彫刻家などのことを綴れるにやと早や吞み込みの粗忽ものもあるべけれど、誠は狩野芳崖菊地容齋狩野一信森寬齋田崎草雲など、名ある近世畫家の逸事奇聞を集め寄せたるものにて、芳崖が毛利邸の障繪を囑せらるゝや、二十餘日安倍川餅を食ふて臥し居るのみなるより友の怪み問ふに答へて「筆を持たざる間こそ畫を作りつゝある最中にてその筆をとりたる時は畫すでに成りたるものぞ」といひし節など、げにぞ天才胸中の抱負を表白せるものなる。文字のうちには往々六ケしき支那熟字も交りあれど、仲々に讀み面白く出來居れば、世の弦齋ものを讀んで、新智識の豐富なるを誇らんとするに心掛けあるものは、必ず一讀して物知り顏にホラを吹く材料を作らざるべからず。（ちよん子）

○家事教本　塚本はま子著　金港堂出版　價七十五錢

書を編するに於て、繁簡そのよろしきを得るは、最も難しとするところなり。塚本農學士夫人はま子女史は、高等女子師範卒業生中の傑にしてこの書は即ち其の著述にかゝる。世間この種の類書なきに非ずと雖ども、かくの如く簡易なる小冊のうちに、複雜豐富なる材料と事項とを收めて、しかも秩序の一見整然たるはあらじ。これを教本とする素より効果多かるべく、又家庭の間に備え讀むも、甚だ有益なり。特に「要用の園藝」なる章のうちに、「外國人に對しては天涯萬里の孤客なる……を憐み……多少の疑念誤解あるを咎めず……慰むるやうすべし、彼れ

等が……異樣なる批評する等は　よろしからず』など記したること、注意缺かりともいふべきか且つ主文を武號活字となせること、至極の良き思ひ付きなり。

（○▲生）

○教育學書解説　（第五）　甲谷進治解
○心理學書解説　（第五）　塚原政治解　各金部四圓六拾錢
○倫理學書解説　（第五）　桑木嚴翼解　育成會發兌

日本人のやうな自尊で生きて居ながら、しかも大馬鹿ものばかりの多い人種には、此る書の發兌せらるゝことが、實に必用である。外國語を小學校に入れるのは、屈辱であらふけれども、此ん譯書を先生たちの讀むのは、必用であるだらふから。塚原氏の分はルボン氏の民族心理學を解したものだがこの三者のうちで第一等の出來だやうだ。中谷氏がナーロプ氏ヘルバルト對ペスタロジー論の解説に至りては隨宜も釋氏もの總行列で隨分亂暴なやり方だ。桑木氏のアリストートル倫理學解説は、まづ中等だ。然し中には『原理から出發して』などと、旅行家の用ひるやうな日本語なま囓りの洋人が用ゐる樣な句もある。又句點の用ひ方が甚だ不足で意義の通じない所もある。兎も角この面白い出版を思ひ立ッたは感心の至りだ。此上とも損得を氣にせず、將來の實行きを根に持ッて續いてもらいたいものだ。

（ガンマ、セイタ）

○詩美幽韻　河井醉茗編纂　内外出版協會版　定價廿五錢

これは『天下を三分して其一を占むる』例の『文庫』派のチヤキ／＼新躰詩人が平生の詩を寄せ集めたる詩集なり。仲には晩翠子第七世の孫とでも思ふゝまで、『崑崙かけて四百州、打てば響くる歐羅巴』などゝ氣張りますもあれば、また『大宮内にうまれては、産衣ゆたかにはぐゝまれ、現女神とめでられて、いつなき少女となりぬるを』と、近處そこらの伯母樣のお顏に似たるもあり。まづ總じていへばノンセンスにて小供くさく、お雛樣の如きものゝみ。これはとヒキ拔きたく思ふ程のもの一つだになし。矢張り卸物の罵倒專問が天下を三分して其一を占むる最捷徑の如くに見受けらる。（俗詩人）

○世界一不思議　長田秋濤譯　定價卅錢
○北　氷　洋　春陽堂出版　定價廿五錢

これらの二書は大奇書なりと吹聽せられて出版せらるゝ十二册中のものにて、少年向きなる一種の探險小說なり。なにはさて、帝國ホテルの支配人まで致され、怪しき佛國旅行家の通辯さへせられ、凡て飜譯のみならず、飜案にも妙を得たりと評せらるゝ長田秋濤子の譯なれば、甚よい惡るからふ筈はなけれど、紙數の割りにはちと實價が高過ぎる樣なり。されど、伊藤侯に用ひられし程の名家の譯著なれば、『詩美幽韻』の菊二分一版百廿五頁にて廿五錢なるに比すれば安きものなり。サア坊ッちやんも孃ッちやんもお買ひ召されませ。（大交際家）

○再版蠶種製造論　相馬愛藏著　經濟雜誌社版　價五拾錢

など陳腐なる古傳を襲述するを以て足れりとせず、著者が明確奇警の頭腦を以て、蠶種製造の方法と改良策とを科學的に記叙せるものを本書となす。著者が主張するところは、種取りと繭取りは、初一の目的を異にするものなるが故に、その用に從て蠶兒の飼育法を別にし、特に採種的養蠶法なるものを建てんとするにあるもの〻如し。而してこの種の繭は、締りある小形ならざるべからざるなど、種々の條件あり。又鹽分の害を備へて海に近き地は蠶種製造所に不適當なりとなし、堆肥の地に生ぜる桑は採種養蠶用に不利益なれば砂礫地の桑を用ふべしといふが如き、蓋し卓絕の見ならんか。且つ西ヶ原傳習所の教案を否定する所論の如き又大に見るに足る。附錄なる日本人躰格論一讀興味多く、日本人躰格の虛弱を以て石黑軍醫監と共に食鹽の過多攝取にありとし、且つこれにまくりを用ふることに水分の過多吸用、母乳の稀薄なごを加へしところ、誠に珍とすべし。其科學的記述を重んじて、しかも詩趣を失はざる如き甚だ凡ならず。養蠶家のみならず萬人皆一讀して利益と面白味とを得べき書なり。（若農）

○萬葉評釋　長井金風著　古今文學會版　定價廿五錢

騷ぎの大なること佛骨奉迎の如く、しかも其割りに馬鹿げたること又佛骨奉迎に於けるが如きは、即ち此書なり。曰く、萬葉言語學、曰く萬葉地理學、曰く萬葉社會學、曰く、萬葉博物學、曰く何。曰く何。甚だ以て圓了博士が作りあげそうな際物著述なり。識見卓拔、頗鵰淨玻璃の鏡の如くなる金風子たるもの、須らく自重すべし。（和歌亂生）

○犯罪者之教育　留岡幸助譯　監獄協會版

犯罪者の改良感化は、まづ其身躰より始めざるべからざるとの理を發見せる北米エルマイラ感化監獄長ウエー博士の著を譯述せるものにして、監獄に於ける衛生及教育設備を詳論し、假令へば、精神の薄弱なる犯罪人を教育するには、入浴を以て最も大効あるものとなすが如き、我が片田舍の司獄官などには、到底解せられ難き句などもあり。蓋し、犯罪者教育の理想を說けるものあり。譯文又明快にして活氣と精神とに充ち、甚だ簡潔の妙趣あり。譯者にして若し著者の思想に感激するところなくんば、豈に此くの如くなるを得んや。（XY庵）

○言文一致　高松茅村著　太平洋文學社版　定價卅錢

世の中には御苦勞な閑人もあるもので、此書の樣な御念のいッた著述は、斯種の

閑人でなければ、この生存競爭のセチ辛き世の中に、誰もやれるものではない。然し、大和田建樹既に『明治文學史』あり、茅村君嘗に『言文一致文學史』なからんやと、これは明治十七年頃より最近なる佐藤迷羊時代（！）に至るまでの文壇の歴史を、一々適例を引用して西洋の文學史風に編んだものだ。實に以てお骨の折れたことだらふ。然し、近くツて御手の屆いたゞけに、材料の蒐集に御困難といふ様なことはなかツたらふ。兎に角萬謝〳〵だ。（トンチンカン）

〇通俗家庭教育　〇明治才媛美譚
〇名婦の面影　〇姫小松

教育學の如くにして教育學ならず家政學の如くにして家政學ならずお伽話の如くにしてお伽話ならず。なんともつかぬは『通俗家庭教育』なり。然し、その何ともつかぬところが値打なるべし（新沼吉太郎著●富山房版●定價五拾錢）〇日の本は岩戸神樂の初より女ならでは夜の明けぬ國の擧れにもやさしの心掛けよりか然らざる者ならぬ伯子男爵の令孃方の寫眞版を口繪にドッサリ詰め込んで賣り出せるは『明治才媛美譚』なり。定價五拾錢とは安いもの（熊田宗次郎著●博文館版）〇『名婦の面影』は開拓社の出版にして、東西古今の名婦に有名の甚だ〳〵簡略なる傳記と、これに婦女に必用なる座右の銘とを組み合せ編纂せるものにて、家庭に一本を備へ置かば、誠に便利のものなり（定價廿五錢）〇何處やらの何やらが賢行きよきを見、お伽話にふるお降りの慾ふが遂々の如く、人氣取に出版せしと思はるゝはこの『姫小松』にて所謂才媛連の歌文を蒐めしもの、御規則通り寫眞版もタンとあり、されど、僕へは一生に勝らず別家は矢張り別家にて本家には御座なく候（姫百合社出版●價廿二錢）（若松）

〇世界宗教一斑　内山正如 瑜伽撰訓 著　定價貳拾錢

かゝる小冊子のうちに、世界の宗教宗旨を殆んど網羅し盡くさんとすることゝ故、素より其一斑にのみ止まりしは、いふまでもなきことなれども、餘りにパールズ、アイ、ヴュユーの觀あるは口惜し。其バプテスト教會を『浸禮教會』とせし如きは、外教に關する智識に於て、著者の甚だ淺きものあるを示すを惜む。（ピエール）

〇初すがた　小杉天外著　春陽堂出版　實價五拾錢

嘗て竹木小清（コキイ）が得意の語り物なりといふ『熊谷陣屋』を聽く。その直實（ナホザネ）が躍如たるエキスプレッションに乏しくして、彼れが聲曲のうちに完全なる現顯をなすこと能はず却て副え物の斧經が、巧に現はされたるに驚きしが、昨夏天外先生の『初すがた』を讀むに及んで、また誠にこの感なくんばあらず。卷中にありて其性格の最も躍如として現はれ居るは、主人公の小俊にもあらず、又龍チヤンにもあらず、實に一種の莫連女なる玉枝なりとす。天外先生は小俊を描き龍太郎を描かんとするに於て、往々性格の統一を欠ひて矛盾に陷れるの節を生ぜしと雖ども、玉枝のうちには少しの無理なく、人工なく、活ける玉枝を出して全く成効せるのもといはざるべからず。始めて高坐に現はれし頃は、至りてウヂ〳〵の處女にて、客の坐敷に出づるも、『…有難う』『は』とのみ挨拶し居りし小俊が、如何に心機一轉は人の心の習ひとはいへ、如何にその貞潔を醉ひに乘じて汚されたりとはいへ、『藝人になツてから未だ一ト月も經たぬに』（二〇三頁）『小母さん、もツと靜に云つても分るぢやありませんか、私ア聾ぢやなくてよ。』『お鶴さん、私も清元の小俊と云や、可なり世間に名を賣つてるものだよ、龍ちやんの一人や二人、お前なんか逆天棒振つて騷いだつて、何か爲やうと思や何にだツてなるよ…。』と兇まきかへるスレツからしになるとは少し人情に於て受取り難きことなり。要するにこれも、天外先生が莫連ものを描くに成効して、處女と一切の素人を描くに未だ臻らざる所あるより來れるものなるべし。かの一夜探偵に踏み込まれし一段の如きは、結構の奇と妙とを求めんとして稍々滑稽の感を起さしむるきのなくんばあらず。又笠田が小俊の買惑を刺戟せんとして、怪しき紺表紙の小本を示せし條の如きは支那小說『肉蒲團』より胚胎せしにあらざる乎。兎も角に、天外先生は自ら寫實主義を稱道せらるゝだけ、描寫に於ては、仲々に餘人の及び難きところ少からず。今短き一例を示さんに、

『何？』『あのね』と格子に額を押着けて、何やら云はうとした時『何したの？』と是も駈けて來た玉枝が、龍太郎の背後に起ツて、戸外を見下した。小俊は其れ切りで默ツて了ツた。框に立ツて居る男女も默ツて居る。久くすると、

『龍ちやん、左様ならよ。』と小俊は潤ひ聲で云つて直ぐ様腕車に乘ツた。『左様なら。』と玉枝は高い聲で云つた。腕車は威勢よく駈出した。（初姿一一一頁）

の如き妙絕至極の文字なり。挿畫家廣瀨子は猶ほ一段の奮勵をなすに非ずんば、作者と互角の筆力には逹し難く、凡て人物の性格に前後によりて統一を欠き、又る所のエキスプレッションをさへ描出することあり。且つや甚だ拙なる押繪細工の如き繪にして、面白味少なく活動を欠く。天外先生が『藝術の美の人を感ぜしむるは、宜しく自然の現象の人の官能に觸るゝが如くなるべし』との說に關しては、評者も說あり。乞ふ近きうち一閑書を呈して之を論ぜんか。（後進有奐妄批多罪）

〔陽炎集〕女夫星〔現代女氣質〇近松の研究〇等
右次號より追々とゆる〳〵細評すべし

明治女學校受捐廣告

○信州長野市

金五拾圓　小田八郎左衛門殿
金五拾圓　今井忍郎殿
金拾圓　飯島正治殿
金拾圓　宮下一清殿
金三圓　鈴木小左衛門殿
金三圓　小林傳兵衛殿
金三十圓　辰野基殿

○信州中野町

金二十圓　擴益合資會社殿
金二圓　中野機業合資會社殿
金五圓　小野幾之助殿
金三圓　高木山作殿
金三圓　小田切彌兵衛殿
金三圓　小林万次郎殿
金三圓　細野富美子殿
金三圓　西澤平八殿
金拾圓　倉田左一殿
金一圓　須藤忠松殿
金七圓　三井七郎右衛門殿
金一圓　佐々木喜助殿
金二圓　小林繁野殿
金二圓　吉田與一郎殿
金二圓　合資會社中野蚕業社殿
金五圓　合名會社日之出松社殿
金一圓　信州機業社殿
金一圓　市川林作殿

○越後

金三百圓　澁谷初次郎殿
金三百圓　新潟某君殿
金百圓　澁谷善作殿
金百圓　三輪潤太郎殿
金一圓　山本巖殿
金一圓　高頭倉吉殿

女學雜誌第五百十二號

明治三十二年五月十四日第三種郵便物認可



（明治卅四年一月廿五日發行）

女學雜誌第五百十二號



(明治卅四年一月廿五日發行)

明治三十二年五月十四日第三種郵便物認可

(五一二)